

若林強齋の近思錄十四目講義

山 崎 道 夫

一、初めに

二、近思錄十四目論

1 朱子の逐篇綱目と葉采近思錄集解篇目

2 山崎闇齋刊行近思錄篇目

3 崎門学派に於ける十四目の尊重

三、強齋十四目講義本文考証と解説・余論

1 楠本海山・内田遠湖・織田確齋手沢三本について

2 凡例

3 本文考証

4 解説・余論

四、結び

一 初めに

本論は昭和四十七年度国士館大学人文学会紀要第四号に発表した「崎門学派における近思錄の尊重」の後を承けるものである。実はつづいて四十八年度の第五号に発表することを予告してあったが、編集

上の都合で今日に立ち到ったものである。すでに何人かの方から後編はいつかというお尋ねを、公的にも図書館を通じて頂いているので、如上の経緯を陳べて御諒解を仰ぐ次第である。

前編では、闇齋が当時流行の南宋の人葉采注を刊去して本文を以て近思錄を刊行し、刊行序を書いて近思錄の本旨を發揚しようとした所以の意、並びに闇齋の精神は、直方・綱齋・尚齋三派に至って益々發揮され、直方の云うように、近思錄は「道学ギリギリノ書」として、また綱齋門の若林強齋の云うように「日夜大小トモニ身ヲ離サヌ書ゾ。夫故此ヲ儒者ノ納戸ト云フ」^(十四目論)として大切にされて来た所以と實際について考察を回らして来た。

近思錄の十四目の編纂体系は、道学の本旨の存する所で、尚齋が「十四篇目、朱子精微之意、至矣尽矣」^(近思錄集解)と云うが如くである。

本論考に於ては、先ず近思錄十四目の本来の形即ち朱子の逐篇綱目と今日通行の篇目に成立した過程を考察し、併せて十四目の組織と価値を論じ、而して強齋の十四目講義の本文を考証研究するに当って用いた楠本海山本、先師内田遠湖本、織田確齋本に併せて、本論考の発

表が今次になったことが寧ろ奇縁ともなつて、ごく最近入手した享和二年写本も含めて、四者を比較考証しつつ、異同を明らかにして本文を考証し、併せて解説、余論を以て内容の研究を試みたい。

二 近思錄十四目論

(1) 朱子の逐篇綱目と葉采近思錄集解篇目

十四目とは、近思錄十四卷六百二十二条の篇目であり、この篇目に近思錄編集の主意と組織体系が現われている。強斎は、

ワキテ此書ハ目錄ニ全編ノ要領ガアル故、山崎先生此書ノ講習ニ毎々此目錄ヲ大学ノ綱領条目ヲ読ム如ク大事ニナサレタル先師ノ物語ニテ先師モ其通ノ事ゾ(目十四論)

と言う。先師とは浅見綱齋であり、十四目を大学の三綱領八条目のように大事にされたというのは、闇齋以来の道統である。

現行の近思錄の篇目は、南宋の葉采が近思錄集解を書く時に、朱子の逐篇綱目に準拠して一卷から十二卷を二字名、十三・四卷を三字として篇題を改め立てたことになっている。葉采の篇目を記すところの通りである。

一道体、二為学、三致知、四存養、五克己、六家道、七出処、八治体、九治法、十政事、十一教学、十二警戒、十三弁異端、十四觀聖賢、

本邦に行われた葉采の集解は皆右のように篇題を立てている。ただ清刊本陸雲竜題詞のつく崇禎乙亥重九即ち崇禎八年(三五六)の集解本(葉采著 陸雲竜刊)

の第七卷は出処義利と四字名になっている。珍らしい事例であるので一応取り挙げて置き、その何故であるかは後日の考究に任せたい。

葉采が篇題を立てたことに対して、清の江永(一七八一)は、その近思錄集註(乾隆七年、一七四二年序)の凡例に次のように言う。

原本十四卷、各為三事類、而無篇目、朱子嘗言、逐卷不レ可下以三一事一名、近本題三篇目、如第一卷云道体篇、亦非其旧、今本語類近思錄逐篇綱目一条、註於卷首、俾各篇有總領、仍不レ失朱子之意。

朱子の考は、一事を以て名づけ、篇目を立ててそれによって内容を拘束する所には無かった。その逐篇綱目は各篇を總領するものであるが、各卷の卷末には次の卷を起すというような細心な配慮のもとに一箇の条が置かれている。江永はこの朱子の意を尊重して葉采の篇目を立てたことを非難し、各篇の首めに、朱子の逐篇綱目の語を取って記してある。例えば卷一では、(朱子曰此卷道体)のように註記した。朱子が逐篇綱目で道体と云うのに葉采が道体と云うのと一致しているが、これは論ずるところではない。さて朱子の逐篇綱目とは何か。

一道体、二為学大要、三格物窮理、四存養、五改過遷善克己復礼、六齊家之道、七出処進退辭受之義、八治国平天下之道、九制度、十君子処事之方、十一教学之道、十二改過及人心疵病、十三異端之学、十四聖賢氣象、(百五)

がそれである。朱子はまた近思錄後序で、十四卷を六つに分類した。蓋凡学者所ニ以求端用力処ニ己治人ノ要、与夫弁異端觀聖賢

之大略、皆粗見其梗概。

その求端とは一卷道体を指し、用力は二卷三卷、処己は五・六・七卷、治人は八・九・十卷、弁異端は十三卷、觀聖賢は十四卷を指している。然し「皆粗見其梗概」としていることに注意を要する。

前言するように朱子は「逐篇綱目」を立てているが、もともと「逐卷以一事不可名」という考であった。たとえば朱子は逐篇綱目で第十卷を「処事之法」とした。葉采は「政事」と題した。朱子の云う「処事之法」とは換言すれば「事君之法」であるが、然し「如第十卷亦不可以事君名」としたところに其の真意が存する。「事君之法」としなかつた理由を見るべきである。朱子は第十卷は君に事えるの一事を以て名づくることはできない。それはこの卷に「人教小童」一段が有るからだとしている。この一条は、第十卷の卷末に在って、次の第十一卷の「教学之道」を起しているからである。ここに編纂上細心の注意が払われていることを知る。十四卷の布置体系は、即ち程朱学つきつめて言えば朱子学の組織であり体系であり内容である。崎門の諸儒がこの十四目を大切にしたいことを軽々に看過してはならぬ。ところが葉采は、「人教小童」の一段を、「此段疑当在三十卷之末」と疑った。朱子の真意に気付かない証拠である。ことに後に近思錄集解を書いた清の張伯行は、葉采の言を是として、この卷を勝手に十一卷末に移動した。

「此条旧列三十卷、葉平巖（葉采字は仲圭また平巖）云、当在三十卷之末、以三所レ言自是教学事也、今從之」

と云つて敢えて無定見不遜のことをしている。然るに小野鶴山は、

此条ハチヨツト見ルト教学ノ様ナ夫レデ集解ニ疑テ教学ノ末ニアルベキコト云タガサフデナイゾ。

と葉采の集解の説の否を指摘し、

政事（朱子曰處事之法）ハ教学ヲ兼ネヌコトハナイ。（中略）政事教学相ハナレヌ旨モ聞ユル故、次ノ教学ノツナギニ此条ガ政事ノ後ニ載ツタモノゾ。葉仲圭ガ其旨ヲ得ヌカラ疑ツタゾ。（近思錄講義）とするのは誠に高い見識で、崎門の儒者の研究の深いことも知られる。

2 山崎闇斎近思錄刊行篇目

闇斎が近思錄を刊行して立てた篇題は十四目ともに二字名である。闇斎は葉註にあきたらず之を刊去して本文を以て近思錄を刊行し、朱子の旧に復えそうとした。この精神は全く江永と一致するが、江永は闇斎歿後の人であるから、闇斎は江註に接していない。このことは、明德版『近思錄』の小著の解題に記してあるので今此処には述べない。闇斎は朱子の原本を尊重し、葉采が朱・呂二子の後序を前に置いたのを、原本通り後に置いた。が然し、江永が葉采の篇題に従わず逐篇綱目を各卷の卷首に示したのと違って、篇題を全卷二字として立てた。葉采は十三卷を弁異端、十四卷を觀聖賢としたが、闇斎は十三卷を異端、十四卷は聖賢を以てした。これは逐篇綱目の十三卷に異端之学とある之学二字を削って異端とし、十四卷聖賢氣象とある氣象二字を削って聖賢としたものと考えられる。なお一卷から十二卷までは葉采の

篇題名と全く同じである。ただし現行近思録の篇題は、葉采に発したものが、江戸時代以来多く通行しているのが現況である。

闇斎の十三・四巻の篇題について三宅尚斎は其の近思録筆記に云う。先生本篇目(先生は闇斎)謂之異端聖賢。而無弁觀二字。葉本目錄作弁異端觀聖賢。直方謂、無弁觀字、則似無為學之為字。義理不レ通、葉本為レ是。

直方は弁異端の弁字が無いと為学の為字が無いと同じように義理通ぜずとしているが、尚斎は之を反駁して、

按論孟篇名、或二字或三字。然朱子編二小学、篇名皆二字。編一啓蒙、皆三字。今此錄二十四篇、唯二一篇三字、恐不レ如此。

と云つて、闇斎は、朱子が小学や易学啓蒙を編するに篇名を二字若しくは三字とした旧例にならつて全巻を二字名としたもので、十三・四巻のみ三字名とするのは朱子の旧例に合しないとし、次に

且曰語類、十三異端之学、十四聖賢氣象、如此看二字、而義理明白としている。葉采は、十三を弁異端としたが、朱子は異端之学としているから、之学の二字を削つて異端とするも義理明白である。直方が為学と弁異端を比較して立てた言説に対して、尚斎は朱子の逐篇綱目によつて弁駁した。

且如三家道出処治体治法之類、亦与異端聖賢二例、恐先生本為レ是。

更思。(近思録筆記)

として、闇斎が全巻を二字名としたことを是としている。尚斎の見解が妥当と思う。

3 崎門学派における十四目の尊重

若林強斎は綱斎の師説を承けて十四目講義を書いた。勿論篇題は闇斎の立てたものに從っている。

四先生一生説ル、所ノ千言万語、孔孟以来ノ正旨ヲシラベシラベシテ見タ時ニ此十四筋ゾ。如何様ニ説(ヒト)弘ゲラレテモ此外ハナイゾ。此書デ此目錄ヲ能ク吞込ガ第一ノ説法也故先達何レモ極メテ是ヲ大事ニ説レタゾ。綱斎先生ハ是ハ大学經文ノ様ナル物ナリ。本文四先生ノ語ハ此目ノ説キホドキュヘ伝十章ノ様ナモノトアル事也。

と云つて、先師綱斎の説を述べ、また

此ノ十四目ガ人為作二ノナイ自然ノ筋目デ、聖人後起ルト雖モ加損スルコト成ラヌ所デ、大学ノ三綱八目ト表裏ヲ成シテ古今学ノスミカネ(墨金)ヲ立レバ三綱八目也。ソレヲ身ニシテユケバ十四目也。天地自然ノ学ノ全体此十四目ゾ。其旨ハ一ケ条一ケ条吟味スレバ見エルゾ。

大学の三綱領八条目は学の墨金、学の本領のあるところ、十四目はその学を身に体してゆく筋であるとする。楠本正継先生は、近思録篇目の重要性について次のように云われる。

この外朱子学の精神を見るため逸してはならぬものは近思録と白鹿洞書院揭示とであらう。小学篇目と共に近思録篇目の重要性に着眼して深く朱子学の組織とその精神とを把握せんとしたことは我国崎門学派の功績であつた。(宋明時代儒学思想の研究)

小学篇目と共に近思録篇目の重要性に着眼したのは崎門学派の功績で

あったとされる。尚齋の謂うように、闇齋が小学篇目が二字であるのにならって近思録篇目も二字名と立てたという説も、右の見解によつてまたうなづかれよう。また曰く、

就中浅見綱齋の近思録講義、若林強齋の近思録十四目師説の如き最も優れたもの、ただかやうにすることが朱子の厚意に協ふや否やは問題とならう。

右の十四目師説とは十四目講義の謂いである。因みに若林強齋に『近思録師説』があるが、『十四目師説』とは別である。このことについてはまた他日に論及したい。右所論中「ただかやふにすることが朱子の原意に協ふや否や」とされることは注目すべきである。朱子は十四巻に逐篇網目を書いたが篇目は立てない。今、篇目を立てて、それによつて講ずるは、朱子の原意に協ふや否やとされたものと思う。

三 強齋の十四目講義本文考証と解説・余論

(1) 楠本海山・内田遠湖・織田確齋手沢三本について

強齋十四目講義の本文を考証するに用いたのは、国士館大学楠本文庫の悔堂(山)蔵弄印のつく海山手抄本と、無窮会平沼文庫の先師内田遠湖翁の遠湖図書印のつく手澤本と、同じく無窮会神習文庫の織田確齋蔵印本の權威ある三本で、併せて筆者が近く入手した享和本を参考にした。先ず楠本端山、海山と正継の三代、内田遠湖、織田確齋三先生の紹介を試みる。

楠本端山名は確蔵、後ち後覺と改めた。字は伯曉、号は端山別に悔

堂とも言う。文政十年一月十五日長崎県針尾島に生れ明治十六年三月十八日針尾の鳳鳴書院に歿した。年五十六。端山は長じて東遊佐藤一齋の門に従学、同門の高足吉村秋陽、大橋訥庵と交る。この頃従来記誦之辞を以て学としていた旧学の非を悟つて悔堂と号した。業成り帰って平戸藩の儒員となり侍講を兼ね、後ち参政に除せられ、権大参事に進んだ。端山の学は詞章の学から性理の学に入り、崎門の学を信奉するに至ったのは、月田蒙齋、弟碩水に負う所が多い。学派は月田蒙齋の学の出る所によれば、三宅尚齋に属する。弟碩水とともに西偏の地に在つて崎門学の鴻儒と称された。端山の子正翼字は君翔、晦堂後海山と号した。よく崎門の学を伝え守成の人とされる。一生を蔵書の整理に費し、家学を守つて之を継承するに専念した人で、「端山先生遺書」は其の手に成る。かの「聖学要領」は、叔父碩水の口授を海山が編録したものであり、碩水によつて増補完成した「日本道学淵源録」は、崎門学派の資料として最も備つたものであるがその成立に海山の力に負うところが多い。楠本家三代にわたる宋明学関係書籍の収蔵は海山の力に負うものが多いとされる。海山は自から集めた書にも、悔堂蔵弄印を押しているのは、家学の継承と顕彰の意と見られよう。ここに用いる楠本十四目講義は、その筆蹟からして海山手抄本と判定するものであるが、これにもまた悔堂蔵弄印が押してある。子正継字は伯哲、蒼茫齋主人と号する。よく父祖の学を承けると共に、宋明儒学思想の新生面を開拓し之を大成した。「宋明時代儒学思想の研究」はその遺著であり、斯学における画期的な大著となった。碩水の蔵書は

九州大学に寄せられ「碩水文庫」として蔵される。端山、海山、正継楠本家三代の蔵書は、国士館大学に寄せられ、「楠本文庫」として蔵される。その縁由は「楠本文庫目録」に詳しい。

先師内田遠湖、名は周平字は仲準遠湖はその号。安政四年十一月七日浜松の医家に生れ、昭和十九年十二月二十三日中野城山の自邸に没した。年八十八。長じて東京帝国大学に入り医学を学ぶも三年にして、遠湖文髓四「迂士説」に「年二十八棄_レ医帰_レ儒」と言うごとく、二十九歳文科大学選科二年に入り支那哲学を専攻、特に重田重礼教授に師事、明治九年選科の業を畢えた。

昭和九年一月一日発行「斯文」内田周平翁喜寿祝賀会の記事に次のように翁の行実を述べる。

遠湖内田周平翁が、夙に帝国大学を出て、経学を講究して国体を扶護し、崎門に私淑して土風を鼓吹し、また能く雄健の文章を以て人心を感奮興起せしめ、教壇に立ちては東洋大学国学院大学慶応大学大東文化学院等に学生を董陶すること五十年の久しきに及べるは世人の熟知する所なるが」として当日の状況を記し、結びに節山塩谷温の寿詩が記されて翁の精神を躍如たらしめるものがある。

遠湖先生喜寿 節山

夙明正閏護皇風。不朽文章万丈虹。齡越古稀又加七。崎門碩果有斯翁。同じく崎門の儒者楠本碩水門岡直養に内田遠湖先生七十七寿序がある。翁の学脈学風をよく伝えている。

往年以教授在熊本高賢也、聞碩水先師講学於針洲、往訪之者四次、

聽其說深信之、遂執弟子礼、先生純奉闇斎、而其氣象則似綱齋。

翁は明治二十五年三十六歳、学習院教授を辞して熊本第五中学校(七年六月第五高等学
校と改称さる)教授に転じ、明治三十年八月官を辞し東歸した。在熊六年、この間肥前針尾島蕉雨齋に楠本碩水を訪れること四次、親炙し遂に弟子の礼を執った。碩水は端山の弟、岡直養も右文に先師と言う如く其の門に出る。碩水の学は月田蒙齋に出て、蒙齋の学は遡って三宅尚齋に発する。故に学統は尚齋派に属するが、氣象と実行はまさに浅見綱齋を思わせるものがある。節山の詩に「明_三正閏_二護_三皇風_一」と。明治四十四年南朝正統論を首唱、堂々政府と闘い南北並立せる国定国史教科書を改訂せしめたのはその一事、一方乃木家再興問題につき將軍の絶嗣の遺言を護り大隈内閣総理大臣に建言、毛利家より入って乃木家を継いだ乃木元智の辞爵を見るに至ったのは、名分論に立つ道義の実行である。熊本より上京した後、「正誼塾」を開いて道を講じた。「迂士説」に、

四十一退開_レ塾、称_三正誼_一。有_レ故中止。今年方五十八(大正三年)復開_レ塾授_レ徒。而其所謂_レ講則始終_三主_二乎道学_一。

と言うごとく崎門の説を信奉し、講ずる所は始終一貫道学を主とした。昭和四年国士館専門学校が設立されるや迎えられて教授となった。時に七十三歳。同十六年八十五歳の時辞去した。昭和十五年平沼男爵創設の無窮会に東洋文化研究所が設立されるや迎えられて専ら『近思錄』を講ぜられた。闇斎は近思錄を講ずるに当時流行の葉采の集解を是ならずとして採らなかつた。後に清の江永の集注は、全く闇斎の精

神に合致するものであった。先師は始終江永の集注本を用いられた。朱子の近思録の読法に、第一巻道体は初学には難解であるから二巻為学より読めとあるが、先師は専ら道体篇を講じ倦むところが多かった。筆者は大東文化学院に於てまた東洋文化研究所に於いて其の近思録講を承けた。特に異端邪説を惡むこと蛇蝎の如く、舌端火を吐くが如く、氣節凛々、思わず受業生の襟を正さしむるものがあつた。先師の貴重図書は無窮会図書館に保存され、手澤本の「近思録十四講義」はその平沼文庫に蔵されている。

織田確斎、名は小確字は斌叔号は確斎。安政五年五月三日金沢に生れ昭和十一年東京に歿した。年七十九。若年司法官に志し司法省法学校に入った。明治十六年中退、司法省内務官を経て依願退官後前田家に入り、学事顧問伝記編纂に従事、大正四年平沼騏一郎男爵等と相談して無窮会を創設し、調査主任として研究調査に當つた。その学は崎門を主とし、近思録を講じ、小野鷗山の近思録を尊重し、「この書、生彩有り」と称せられたと。蔵書は織田文庫として今無窮会に蔵さる。

今回の研究は海山、遠湖、確斎の権威ある手沢三本を用いることができた。その他に最近入手の享和二年夏山中修珪なる者が写した近思録十四目講義がある。強斎講義本に似るが時に簡略また強斎に見えぬ講義も混る。強斎講義をもとに何人かが加除したものと思うが、その何人なるかを今明かにし得ない。重要な見解もあり、余論に引用した。

なお同じく十四目講義には別に竹内式部のものがある。無窮会に蔵されるものは、遠湖先師手書写本一本で、巻軸に先生朱書され、「此

書原本第二巻道体講義ノ末ニ署スルコト左ノ如シ」として、更に墨書で、「明和二乙酉年春二月竹内敬持先生講述 門生謹書」とあつてこの書の由来を知ることが出来る。講義は強斎に比して簡約であるが、勤王の大義に殉じた式部の精神に触れる思いの有る重要なもので他日紹介を試みたい。

また遠湖図書印のつく十四目講義本の巻軸に先師朱書されて、

近思録十四目講義別本 其所購全与 此本同者 卷末有記如左

先生曰右筆記ハコトノ外不達者ナモノガシルシタユヘ拔タリ落タリシタ事ガ大分アルガサレドモ大旨ハ是デモキコエルユヘ其元ノ記シヲカレタト参考ノタメニ示ストノ事也

享保六年辛丑十月三日京都官邸写

拠此年曆則此書蓋強斎所レ講而ニ非鷗山所レ講也 周平
とありまた最後に、

右近思録十四目之講墨山先生藏書拝借仕記レ之者也
の原本の写者の語が識される。則ち遠湖本はもと西依墨山蔵のものである。墨山は綱斎から強斎更に西依成斎、西依墨山と承ける学統でまことに貴重な一本である。

他に無窮会に、享保二十一年辰二月十七日夜書 平康永の識語のつく白紙七枚の写本十四目講義別本がある。享保二十一年は、強斎歿後四年のことである。内容は簡略なもので強斎講義によって成つたものと思うが、これは今回は取り上げない。

(2) 凡 例

- 一、底本は楠本海山本を用い、内田遠湖本、織田確齋本と一々比較考証を行い、重要な異同は、それぞれ頭注に記し、かつ是否の見解を示し、是否何れとも判じ難いものはそのままに挙示した。なお楠本本は海山が朱点で読点を入れてあり、遠湖本も先師がそのようにしてあるが、確齋本は本文のままである。
- 一、頭注の本文個所には*印をつけて明かにした。
- 一、十四目講義の解説と研究上必要なものには、(1)(2)の番号をつけて、後の解説・余論欄に番号順に記した。書人名等は煩瑣にわたるので解説を省いた。
- 一、余論は、筆者の案ずるところの十四目論を記した。
- 一、底本の語法上の一種のくせはそのままに存した。一例を言えば、「心ガケルナフテ」は「ナウテ」が正しい。ナクテのウ音便がナウテになる。いったいに近世の儒者の口義本は、ウ音便をフ音で表記しているくせが目につく。
- 一、本文の〔圈〕点は、楠本本についているままを記して原本の趣きを存した。この〔圈〕点は海山の付けたものと推定する。
- 一、解説、余論に崎門の儒者の説を引くことが多い。就中小野鶴山の近思錄講義を多く引用した。鶴山は強齋門の高足で出でて若狹の藩儒となった。綱齋・強齋の師説を承けることが尤も強い。
- 一、本文送りがなよみがな等で()を付したものは筆者による。原文にはない。
- 一、なお強齋の十四目講義は、存養(第四)の前に克己(第五)を先にして説いている。強齋の意の在るところで注意を要する。

書中の圈点は楠本本の原本のまゝ。
前論

ノヤウニ内田本同じ。織田本ノ通りニ作る。
少モイミアデナ内田本同じ。織田本少モ巧ニアジナに作る。享保本ユミナコトモナクに作る。蓋シユミはイミの訛。なおイミは異味、珍らしい味、アデは味、イミアデナは珍らしい味わい、変ったこと。
分ガ享保本極メテ大切ノ旨アツテノ事ナリ。とする。以下享和本には二本にない相当分の講義が記される。余論の項に記す。

(3) 近思錄十四目講義本文本文は楠本海山本

総ジテ古人ノ書ニ題名セラル、ハ、其書ノ持テイルナリ。*ノヤウニツイテアル事デ、*少モイミアデナ事ハナヒゾ、易ハ陰陽ノ書タルニヨツテ、日月ノ字ヲ合テ易ト有、詩ハ古人ノ吟詠ヲ集タ三百篇ノ詩ナル故ニ、詩ト有、書ハ唐虞三代ノ事ヲシルシタニヨツテ、書ト有、小学ハ小子ノ学ブ書ナル故、小学ト云、大学ハ大人ノ学ブ書ナル故ニ、大学ト云、朱子ノ一生著述セラレタ書ハ大分ナレドモ、スベテメヅラシヒ題号ハナヒ、通鑑綱目ホド大分ノ事業ハナケレドモ、温公ノ通鑑ニヨツテ、綱目トヲ立タユヘ、綱目ト云、此近思錄ハ呂東萊ト談合有テ、四先生一生ノ粹説ヲ集メテ、此書トナツテ、此書ニ限リテ近思錄ト有ハ、先づ*分ガアラフト思フベシ、他ノ書トチガフテカフアルハ、深イ分ケガアロフト心ヲトメテ思フタガヨイ、後世ノ学者ノ書ヲアラハスニハ、サマザマノ題号ヲエランデ、題号デ見レバコトゴトシフハ有レドモ、カザリバカリデ実ハサシテナンノ事モナイズ、(山)朱子ノナニト題セフゾイカサマニモ是ガヨカラフト云ヤウナ事ハナヒ、必至ト

〔近〕の義
心―織田本―意に作
る。

怡顔柔声ノ―織田本
はレ点を省く。

初学―内田本―初学ナ
リノに作る。

カフ題セラレネバナラヌ旨アツテノ事ゾ、然ラ
バ何ト云事デ近思トハ号セラレタゾナレバ、
〔近〕ト云*心ハ、眼前今ノ場ヲ退(め)ズ、⁽²⁾サシ
アタリノ事ヲ近ト云、今日親ニ対スレバ子タル
ナリ、君ニ対スレバ臣タルナリ、是ハ⁽³⁾全体ハ
サシアタリナリ、孝ト云ニモマツ、⁽⁴⁾怡顔柔
声ハ、⁽⁵⁾晨省昏定ハト云ハ、一事一事デ云サシ
アタリナリ、忠デ云テモ亦然リ、學術デ云ヘバ
⁽⁶⁾収心ニ放心ニハ全体ノサシアタリデ、マヅ浮氣ニ
ナイヨウニ、悪友ト交ラヌヤフニト云ハ、一事
一事ノサシアタリナリ、義理ヲミガカネバナラ
ヌト云ハ、全体ノサシアタリデ、マヅ日用常行
孝悌忠信ノ事カラミガクハ、一事一事ノサシア
タリナリ、ドチヘドウシテモ⁽⁷⁾ムクナリニサシ
アタリガ有ツテ、ソレナラバイツマデモ同ジ事
カトイヘバ、梯子ヲノボルヤウニ一段一段サシ
アタリヲフムヨリ外ナクシテ、一段スハメバ其
次ノサシアタリガ有テ、ドコマデノボツテモム
クナリヲハナル、事ハナヒナリニスハムゾ、初
学ハ*初学ノサシアタリ、ソレガスハメバスハ
ムナリノサシアタリ、子路ホドナレバ子路ナリ
ハサシアタリ、子貢ホドナレバ、子貢ナリハサ

〔思〕の義
心ガケル―織田本―心
カケルに作る。

ソコシン―内田本同
ジ。織田本はソコ心と
する。底心は実心の
義。

仕ヤウ―織田本―事ヘ
様に作る。
此―織田本―其に作
る。

為己―織田本―レ点を
つけない。

シアタリ、顔子ホドニナレバ顔子ナリハサシア
タリ、聖人ノ域ニ至ルマデ、サシアタリヲハナ
ル、事ハナヒゾ、〔思〕ト云ハ、*心ガケル事デ
カニトゾトナゲキ思⁽²⁾事、畢竟学ハ思ニモトゾ
クナレバ、ウカト書ヲ読ンダリ、隙ニヘニ書ヲ
見ルノト、云テハ、遊山飢水モ同⁽³⁾事デ、何ハ
ヤクニタハヌ事、兎角*⁽⁴⁾ソコシンカラ心ガケ
ルデナフテハ、心ガヒマニナツテアルユヘ、学
ブトコロガ我身トアヅカラヌゾ、サシアタリテ
ソレ親有ル身デハナイカ、眼前サラズンテ親ヘ
ハツカヘヤウヲ何トゾ知リタイ、ソレ臣タル身
デハナイカ、眼前サラズンテ君ヘハ*仕ヤウ
ヲ何トゾ明⁽⁵⁾メタイ、サシアタリ*此場ヲサ
ラズ、後ト云事モナク余処⁽⁶⁾ヘニヅル事モナ
ク、何トゾ不忠ノ臣ニナラヌヤウ、何トゾ不孝
ノ子ニナラヌヤウニト云ガ近思ニテ、⁽⁷⁾乃下学
為⁽⁸⁾己ノ事デ、真味ノ聖学ト云ハコレゾ、ソコ
ヲハケテ学問スルノ書ヲ読ムノト云ハ、学ト云
モノデハナヒゾ、論孟ヲ讀⁽⁹⁾デ誦デモ、ソレ
ハ鼠ノ草紙ヲヨムモ同ジ事デ、何ハヤクニタハ
ズ、兎角⁽¹⁰⁾ウキヒラ見ル事デナク、サシムキサ
シムキシタ事デ、何トゾ⁽¹¹⁾本法ノ君父ヘノ事ヘ

ノツター内田本同じ。
織田本ノリタに作る。

何ヲ織田本何デに作る。
織田本を是とする。

必至トサシムキー内田本・織田本ヒツシリトサシムキに作る。楠本本を是とする。

卑ケレバー内田本同じ。織田本卑シケレバに作る。否とする。

カハリタル織田本同じ。内田本カハリハルコトに作るは否。
ソレ内田本同じ。織田本ソレヲに作る。
ソレと呼びかけたことば。楠本内田本を是とする。

千五百年織田本同じ。内田本は千百年に作る。思うに五の脱略か。注に千五百年の出典を記してある。

ヤウヲ学バイデハ、何トゾ本法ノ人タル道ヲ全シヲ、イセイデハト云ガ、正當正面、^{四四}図ニハツタ学ゾ、飲食スレバソレ必至トサモシククワヌヤウ、衣服キレバ必至トジダラクニキヌヤウ、人ニ対スレバソレ必至ト不信ノナヒヤウ、^{*}何ヲ云テモ、^{*}必至トサシムキ眼前サヲヌ旨ヲ、端的ニ合点スベシ、コハヲハナレテスル学ハ、^{*}卑^(四)ケレバ俗学ト云、高ケレバ異端ト云、

此近思ノ合点ガ立テバ、聖学ノ道中へ踏出シタト云モノ、ソレヨリシテハ次第次第二義理ニモス、ム管ゾ、サナクテ学問ヲ少シシタイノ、何ヤカヤヒロフ覚ヘタイノト思フ様ナ事デハ、学バヌサキモ学ンダ後モ、^{*}カハリタル事ハナヒゾ、学バザレバソノ通り、兎角学ブト云カラハ、人ノ人タルナリヲ学ブデハナヒカ、^{*}ソレ今ノ子タルナリヲ見ヨ、子タル道ニ背テ居ルゾ、ソレヲ何トゾ、^{四四}ロクナ子ニナリタイトナゲイテ学ゾヨリ外ニ学ビヤフハナイ、君臣デ云テモ、夫婦デ云テモ、兄弟デ云テモ、朋友デ云テモ、ソノ通りゾ、所レ謂、^{四四}平易着実ト云ハ、コハ、ハ事ゾ、^{四四}孔孟歿シテ後、^{*}千五百年ノ間、道学寂寥トシテキコユル事ナヒト云ハ、此近思ノ学ナ

ミツムベキ織田本ミツベキに作る。是とする。
論ズルモ織田本論ズルニモに作る。

ジキニ織田本直ニに作る。

有フナラバ織田本アルゾナラバに作る。

ヒ^三故ゾ、^{四四}漢唐ノ間資質ノヨイモノガナイデモナク、博識ナモノガナイデモナク、董仲舒韓退之ノヤウナモノアレドモ、其親ヘノ事ヘヤウハドウ、出処ノ義ハドウト見レバ、ナンニモ^{*}ミツムベキ事モナイゾ、スレバ此等ノ衆ハ器量ガナイデモナケレドモ、本法ノ近思ノ学ガナヒユエゾ、其外ハモトヨリ^{*}論ズルモ及バヌゾ、四先生ノ四先生タルトコロ、上ミ孔孟ノ道統ヲ継デ、下モ天下後世ノ学者ヲ教ヘ導クトコロ、又四先生ノ統ヲ承ルモ、亦此二字ノ力ニテ、此二字ヲ以テ此書ノ題号トセラレタレバ、聖学ノ真味此書ノ此書タル処、コレヨリ外ナフテ、天下後世ノ学者ニ示スノ意甚深切ナル事ヲ可レ見、然レバ今日学者孔孟ノ道ヲ学バント志サバ、コ、ヲ昔物語ニセズシテ、^{*}ジキニ今日ノ手本トシテ、禄ノ為ニスル事モナク、名ノ為ニスル事モナク、本法ノ人タル身ニナリタイト、飢渴ノモノノ飲食ヲ求ムル如クニ^{*}有フナラバ、四先生ノ地位ニハ至ラネドモ、其道ニハ踏出シタト云モノ、^{四四}ソノナリヲ積累セバ、ソノ地位ニイタライデナントセフ、イザリデモイデト思ヘ

ノボルゾナレバ―内田
本も同じくナレバで切
つてある。
思へ―内田本・織田本
思へヨに作る。
身ニ切ナ病―織田本同
じ。病を内田本は疾に
作る。

骨体―内田本・織田本
―骨髓に作る。是とす
る。

〔録〕の義

書ニスル―内田本・織
田本―ケ条書ニスルに
作る。楠本本も一ケ条
書キニするの意であ
る。

編集ノ事ガ有ルニ因テ
―内田本・織田本―編
集ノ事ニアツカル事ニ
に作る。

トリコシ―織田本―ト
リコシノに作る。

ガナル事ガ有故―織田
本―ニナル故に作る。
是である。

バ、富士山ニモ *ノボルゾナレバ、此近思ノ合
点デ踏出サバ、本法ノ処へ至ラヌト云事ハナヒ
事ゾ、病ノ有ル者ハ薬ハセンギスルヤウニ、今
面々ハ身ガ道ヲ学ブノ病人ト *思へ、サアラバ
眼前去ラズニヒシヒシト ④身ニ切ナ *病ノアル
事が見ヘテ、ヒロフ学ブ事デハナヒト、近思ノ
旨ヲ可レ知、サナケレバ論語ヲ読デモ、孟子ヲ
読デモ、此近思録ヲ読デモ、昔ノ子ノ曰ニナ
ツテ、何ノヤクニタ、ヌコトゾ、此二字ガ此書
始終ヲ貫テ、所謂 ④四子ノ階梯ト云 *骨體真味
コ、ニアル事ゾ、学者其 ⑤近 ⑥思 ⑦哉、〔録〕ハ
一ケ条一ケ条 *書ニスル事、目録ノ録ナリ、録ノ
集ノト云ハ、書ノナリニヨツテ呼ブ事ゾ、扱平
生ノ書ハ序カラヨムガ法ナリ、コレモ序カラ読
管ナレドモ、先師以來此序ハ全編畢テ後ニ講ズ
ル事ゾ、ソレ如何トナレバ此序ニハ *編集ノ事
ガ有ルニ因テ、④トリコシ問答 *ガナル事ガ有
故、全編畢テ其上デ読ム事ゾ、

十四目論

此書ノ講習ニ―内田本
―織田本―此書ヲ講習
セラレシ時ニに作る。
毎々―織田本―毎ニに
作る。
詮義―織田本―詮議に
作る。

如クシテ―内田本・織
田本―如クニシテに作
る。

有ゾヤ―内田本・織田
本―有フヤに作る。

有ゾヤ―二本こも有
フヤに作る。

ドチヘ―織田本ドチラ
ヘに作る。

寒熱ヲ―内田本・織田
本―寒熱ノニ作る。

ネテモヲキテモ―内田
本同じ。織田本―ネテ
モサメテモに作る。

四先生デ―織田本同
じ。内田本四先生ゾに
作る。

十四目

扱何ノ書デモ目録デ其書ノ編ミヤウヲ見ルナレ
バ、イヅレモ大事ナレドモ、ワキテ此書ハ目録
ニ全編ノ要領ガアル事ニ、山崎先生 *此書ハ
講習ニ、 *毎々此目録ヲ大学ノ ①綱領条目ヲ読
②如ク大事ニナサレタルアル ③先師ノ物語ニ
テ、先師モ其通リノ事ゾ、トクト此目録デ *詮
義セネバ、奥デハ貫ヌク旨が見ヘヌ、 ③白鹿洞
揭示ノ如クシテ、日々此十四目ヲツラツラ玩索
シテ、此外ニモマダ *有ゾヤ、又ハ是ヲヘラス
事モ有ゾヤト、 ④非太刀ヲ打テ見タガヨイ、兎
角学ハコレヨリ外ニハナイ、 *ドチヘドフシテ
モ、 ⑤水火ノ寒熱ヲ変ゼヌヤウニ合点スレバ、
ソコデヨク読ダト云モノ、サナシニタダツイス
マシテ通 ⑥リテハ、何ノ用ニタ、ヌゾ、扱此
書ハ平生大小ヲ離サヌヤウニ、 *ネテモヲキテ
モ、ドチヘドウシテモ、手放ス事ナク熟玩セ
ヨ、何レノ書モ同 ⑦事トイヘドモ、前ニモ云ヤ
ウニ孔孟ヲ学ブノ手引ハ *四先生デ、其一生ノ
精粹ガ此書ト成テアレバ、聖学ノ得レカハ此書
カラ得ル事ゾ、 ⑧義理精微近思録尽之トイヘル
モ、只クワシイ書ジャト云タ事デハナイ、学問

為学有事—内田本・織田本為学アリに作る。楠本本為学有ル事の意。

第一目「道体」

朱子曰、此卷道体。心—織田本—意字に作り、コ、ロとよみをつける。

未定ノ説ガ—内田本・織田本—未定ノ説カに作る。是とする。

形有ルナリノ形デコレ道体ゾ—織田本同じ。内田本—形有ルナリノ形ゾ、冲漠無朕、万象森然ト云ガコレゾに作る。

太極図説解—内田本・織田本—太極図解に作るは否。朱子の太極図説解である。

ノシヤウガ承玉リタケレバ、*為学有事、出処ノ談合シタケレバ出処ノ部ニノコル処ナシ、政務ノ事ガ聞タケレバ治体治法政事アリ、凡修己治人ノ全体何ジャト云テ残レル処ナヒ、スレバ日夜大小トトモニ身ヲ離サヌ書ゾ、夫故此書ヲ⁽⁷⁾儒者ノ納戸ト云、惣ジテ家ハ玄関書院台所等マデソロハネバ人ノ家居ハナラヌガ、⁽⁸⁾全体ノマカナイハ納戸ニ在ゾ、四書六経ハ修リテモ、其真味ノ義理ノ力ハ此書デナケレバ得ヌゾ、学者其可レ忽乎、

「道体」文字ノ*心ハ道ノカタチト云事、語類

ニ⁽¹⁾体段ノ体ジヤノ、体骨ノ体ジヤノト有レドモ、*未定ノ説ガ記録ノアヤマリゾ、形体ノ体ト云ガ定説ゾ、眼前見レバ、天地万物顯然トシテ形ノ見ヘタナリノ形ヨリ外ニナフテ、ソレ其形ト云ヌサキノ形ガ、夫⁽²⁾其形ナリユヘ、今ハ形ヲ離レズ、⁽³⁾前ヲクル事モ後ヲ推ス事モナク、⁽⁴⁾形ナインナリノ形ガ、形有ルナリノ形デ、コレ道体ゾ、易曰、一陰一陽之ヲ謂レ道、而⁽⁴⁾注ニ陰陽迭運ル者氣也、其理ハ則所謂道ト云テ、*太極図説解ニ即ニ陰陽ニ而指ニ其本体ハ不レ離ニ乎陰陽ニ而為レ言耳ト有ルガ、道体ノ説也、形ガスグ

道トスルニタラズ—織田本—この八字を欠く。補入するを可とする。

冲漠無朕万象森然已具ト云ガ、道体ハ—内田本・織田本—ト云ガ道体ゾに作る。是ならんか。

ニ道トイヘバ、形氣ニヲチテ形氣ニハ⁽⁵⁾消息清濁正偏ノチガイ有テ、*道トスルニタラズ、形ヲ離レテ道ジャトイヘバ、有形ノ前ニモ一ツ何ヤラ物有テ、カノ老釈ガ虚無寂滅トナル、ソレデ形ヲ離ズ形ナリノ形タル本体ガ道体ゾ、⁽⁶⁾至極形ナインナリガ至極形アルナリ、至極形アルナリガ至極形ナインナリ、コレガ道体ゾ、火デイヘバ、モユルガ火ノ形デ、モユルガ道ノ形ゾ、水デイヘバ、流ル、ガ水ノ形デ、流ル、ガ道ノ形ゾ、道体ガモヘ道体ガ流ル、ジヤニヨツテ、何ホドキヘテモキヘテモ道体ガヤマネバキヘヤム事ガナヒ、キユルハ氣ノ消息デ、道体ナリノモユルモノハイツマデモキハマリナイゾ、残り何デモソレゾ、老釈ハ氣ノ消息ヨリ先ガ見ヘイデ、消タヲ見テ虚無ジヤノ寂滅ジヤノト云テ、キヘテモキヘテモモユル道体ノ妙ヲシラヌゾ、ソレデ虚無ト云テモ天地万物虚無デナシ、寂滅ト云テモツイニ寂滅シタ事ガ一ツモナシ、所謂無実ト云ガコレゾ、*⁽⁶⁾冲漠無朕万象森然已具ト云ガ、道体ハ天地万物トイハザルサキガ即今日ノ天地万物、今日ノ天地万物ハ即天地万物トイハザルサキノ天地万物ゾ、人心デ云テモ同ジ

仁―内田本・織田本―
仁ト云に作る。
ニツノ手―内田本・織田本ニノ手に作る。是とする。
コレヲ―内田本・織田本―ソレデコレヲに作る。
小学大学トモナル―楠本本・織田本同じ。内田本は小学トモナリ大学トモナルに作る。是とする。
全体―内田本・織田本全体ノに作るがよい。
第最初―内田本同じ。
織田本―第を朱字で真に訂正している。真最初(まさいしよ)である。是とする。
見アテト云テ―内田本・織田本―目当テト立テニ作る。是ならんか。
虚無ジャノ―以下事デハナイまでの五十七字の文は、楠本本・織田本同じ。こゝを内田本は、虚無ジャノ寂滅ジャノト云事デハナイと簡略に表現している。

事、未発ノ中ガ即已発ノ和、已発ノ和ガ即未発ノ中、ナンデ云テモ皆同^③事ゾ、コ、ヲシラヌヘ日用藝倫ノ間ヲハナレテ道ヲ語ルヤウニナリ、サナケレバ博ク愛スルヲ。^{*}仁、行テ宜スルヲ義ト云ヤウニ、道ガ^{*}⑦ニツノ手ニ^⑧落チタリ、父子ノ親モ君臣ノ義モ、アトカラツケタリノ^⑨モメヤイデ出来タ道ノヤウニ思フ、ソレジャニヨツテ面々ノ料簡ノヤウニ道ヲ見タテタリ、スイタヤウニ学ヲ立ルヤウニナルゾ、皆コノ道体アル事ヲシラヌ故ゾ、^{*}コレヲ第一卷ニ立テ、コレ有テ天地モ立チ万物モ生ズル、コレ有テ聖賢トモナリ、^{*}小学大学トモナル、^{*}全体大心柱トコレガ立テ有リテ、微塵コチカラ料簡ヲツケル事モ見立ル事モナラズ、学モコレデスル、政モコレデ立ツ、異端モコレデ弁ズル、全体ノ標的トコレガナツテアル、コレヲ一番ニ標的ト立ヌト、後世異端邪説ノマギレモノアツテ、本原本体ニマドヒガ出来テ、何モ彼モツブル、故、頓トコレヲ^{*}第最初ニ立テ、天地万物全体ノ心柱道体ト云事ガアルゾト、^{*}見アテト云テ示セバ、^{*}虚無ジャノ寂滅ジャノト云事ハヒトリソデナキ事ト見ヘテ、マドウ事ハナフテ、サ

為学―内田本同じ。織田本―以学に作るは誤りである。

先師―内田本・織田本先師ノに作る。

第二目〔為学〕

朱子曰、此卷為学大要。

人デ―織田本―人ニテに作る。

ソレゾレ―内田本・織田本―ソレゾレノに作る。

有第ニナイガ―内田本・織田本―友第ニナイモに作る。是とする。
火ハ必至ト―内田本・織田本―この下に、モヤサネバナラズ、濁ル水必至トの十四字がある。是とする。よつて下文に補った。

テアタマカラ道体ノ事ヲ知テユクト云事デハナヒ、其目アテトシテユク事実ハ^{*}⑩為学以下ノコトデ、自レ卑自レ近下学而上達スル學術ハ、論孟ノヲシヘニカハル事ハ何ニモナヒゾ、ソレデ次ハ為学ト次第スル事デハナク、頓ト十四目ナガラ貫テ全体ノ目当テ、今日学者ノ学ンデユクサシムキハ、為学以下ト思フベシ、ソレデ^⑪朱子モ二卷目為学ヨリ講ゼラレタト有ル事、^{*}⑫先師講習セラレタモ其トワリゾ、

〔為学〕^⑬⑭本然カラ云ヘバ火ハ自ラ燃^⑮ル、水ハ自ラ流ル、道デハアレドモ、氣質カライヘバクスポル火モアレバ、濁ル水モアル、^{*}人デイヘバ子デサヘアレバ皆孝ナ子、弟デサヘアレバ皆弟ナ弟トナレドモ、^{*}ソレゾレ、^⑯⑰生^⑱ツキカラ見レバ、親子デハアリナガラ、恩愛ノウスイガアリ、兄弟デハアリナガラ、^{*}有第ニナイガアル、燃ル管ノ火ガクスポリ、澄ム管ノ水ガニゴルト同ジ事、凡何デ云テモ理皆然リ、スレバクスポル^{*}火ハ必至ト「モヤサネバナラズ、ニゴル水ハ必至ト」スマサネバナラヌ如ク、不孝ナ子ハ必至ト孝ナ子ニシタテナヲサネバナラズ、不弟ナ弟ハ必至ト弟ナ弟ニシタテナオサネバナラ

アタリマヘノ―織田本
―ノをゾに作る。楠本
本を是とする。

必至トタノミキツテ―
内田本・織田本―ヒツ
シリトに作る。楠本本
を是とする。
学ヲスルハ―内田本・
織田本学ヲスレハに作
る。

頼デ―織田本―頼テに
作る。

近思録―織田本―近思
に作り、録字を欠く。
是とする。

ヌ、必至ト、*アタリマヘノ其⁽³⁾シタテナヲシヤ
ウノ名ヲ学ト云、本然カライヘバ道体、人タル
道ノ入リヤウハ学ノ一字ニ、*必至トタノミキツ
テ、人ヲ人ニスルハ此一字ニアツテ、⁽⁴⁾ニジリ
モスジリモナラスアタリマヘニナツテイルゾ、
為ト云ハ結構ナ事ジャゲナユヘスルノ、スイタ
故ニスルノ、ヒマナ故スルノ、*学ヲスルハ早
速歸縁デモ得ルト云効ガ有ノト云ヤウナウロツ
イタ料簡デハ為デハナヒ、何トゾト無ニ余義志
カラ力ヲ用ヒテスル事ゾ、飢ルモノハ喰モノヲ
得タイト求ムル如ク、寒⁽⁵⁾モノハ衣ヲ得タイ
トイトナム如ク、得ネバラカヌ存念カラシワザ
ニスル事ゾ、サテ為学ノシヤウノ目ハ、致知
存義克己ニ在テ、コレハ何ト筋ワケズ惣体学デ
ナケレバナラス、人道ハコレ一ツテ、*頼デ居ル
事ヲ云ゾ、⁽⁶⁾道体為学ト次第スル事デハナイ、全
体ノ大本源大本体ト立テ有ルガ道体デ、此一巻
ハアト、次第スル事ハナヒゾ、サテ今日人道ノ
当然、*近思録ノサシムキヨリ云ヘバ、為学カラ
次第シテ有ゾ、必至ト学ガタノミニナツテ有故
ニ、子タルノ道モ立、臣タルノ道モ立、禽獸ヲ
モマヌガル、故、人ト云トニジリモスジリモナ

詮義―織田本同じ。内
田本全義に作るは写し
誤りか。

第三目〔致知〕
朱子曰、此巻格物窮
理。
トアレバ―内田本・織
田本―トアルハに作
る。

ヒラケヌ―内田本ヒラ
ケスに作るは否。
如ナフ―手落ちな
くの義。いたし方がな
いという所在なしとは
異なる。
スベラシラデハ―内田
本同じ。織田本―ドウ
モスベラシラネバに作
る。

ラズ、学ガタノミニナリキツテ有故、二巻ニ為
学ガ立ゾ、凡四書六經人道修業ニアツカル事
ハ、悉ク為学ノ筋ゾ、道ノ、*詮義ノ事ハ皆悉ク
道体ニアルゾ、道体ハ天地モコレカラ生出ス、
人物モコレカラ生出ス、政務モ學術モ聖賢モ四
書モ六經モ、コレカラ生出ス、全体ノ大本源ト
ント立テ有テ、サテ人道ノサシムカヒキツテ
イル当然ハ、必至ト為学ヨリ以下ノ事ゾ、サテ
三卷四卷五卷ノナラビヤウハ、為学ノ外ニ有デ
ハナイガ、サラバ為学ハ何トシタモノゾト云ヘ
バ、其目ガ三ツアルゾ、致知ナリ存義ナリ克己
ナリ、ソレヲワケズニ学問惣体デイヘバ為学ニ
シテ、其筋ヲ分テイヘバ此三ツゾ、マツ

〔致知〕*トアレバ、⁽⁷⁾兎角学ハ知ルカラデナケ
レバ端ガ、*ヒラケヌ、親ニツカヘテハドフスル
ガ孝、君ニツカヘテハドウスルガ忠トシラネバ、
*如在⁽⁸⁾ナフ忠孝ニアリタイと思フテモ、*ス
ベラシラデハナラス事、⁽⁹⁾面々ノ料簡デハ忠ト
思フガ不忠デアロフヤラ、不孝ト思フガ孝デア
ラフヤラシレヌ、ソレデ致知ハシルヲキハムル
ト云事デ、我料簡⁽¹⁰⁾デハハカズシテ、其上ヲ
推究テ本法ノスベラ明ムルヤウニスルヲ云ゾ、

知ラスハ—織田本—知
ラネハに作る。

義理明ニナフテ—義理
が明かでないで、の意
で、織田本同じ。内田
本—明ニナツテに作る
は否。

イカズ—織田本—ユカ
ヌに作る。

寄会—内田本・織田本
寄合に作る。

ハヅカニ—織田本—ワ
ヅカニに作る。

目トテモ—織田本—目
トデモに作る。内田本
—本阿弥ガ目デモ素人
ノ目トデモに作る。

(3) 究メヌ事ハ是非モナヒ事ジャハ、(4) 今井ガ粟
津ノ討死ハヨイケレドモ、我君ヲ朝敵トナシ、
共ニ大不義ニオチイル事ヲシラス、今井ガ心ハ
如在ナケレドモ、*知ラスハシヨウ事ガナヒ、
*只義理明ニナフテ我一身ノ働キハツヨイヲ忠
ト云事ナラバ、虎狼ノアレテ人ヲ害スルモ同じ
事ゾ、又孝ト云テモ(5) 郭巨ガヤウニ子ヲ埋テ親
ヲ養ハ如在ナケレドモ、子ヲ埋テ親ヲ養フノ却
テ大不孝ジャト云事ガ合点ガ*イカズ、コレ皆
推究ル事ヲシラズ、(6) 我料簡デスマシテヲク故
ゾ、書ヲ読デ義理ヲ講明シ、師ニツイテ疑ヲ質
シ、朋友*寄会テ吟味スルモ、此皆致知ノ事ナ
リ、兎角何カラナリトモ、義理ヲ推究メ推究メ
テ、我知ヲ十分一杯ニツメヨルヲ致知ト云ゾ、
人ノ日用ハ知識ダケホドナラデハ、ハタラカヌ
モノデ、知識ハミガクダケホドニ明クモノゾ、
*今ハヅカニミガクト云ト、ミガカヌサキノ我
料簡トハチガフモノ、ミガクニシタガイ次第ニ
ヒラケテクル所ガ有ルモノゾ、タトヘバ本阿弥
ガ*目トテモ素人ノ目トデモ、チガイハナケレ
ドモ、ミガキタ目トミガカヌ目トチガイアル、
サヤハヅストコレハ何、アレハ何ト見分ルハ、

近思—織田本同じ。内
田本—近思録に作る。

杜律—楠本本・内田本
織田本ともに同じ。則
ち杜甫の律詩の義。

イフ様—内田本・織田
本—イフ様ニ作る。

究デ—内田本も同じ。
織田本—極デに作るが
よい。

ミガキタ故ニ自然ニ(7) 目ナリニ覚ユルゾ、ソレ
ト同じ事デ忠ヤラ孝ヤラミガカヌサキハ見ヘヌ
ガ、ミガクニシタガイソレダケホドヅツ知識ト
ナルゾ、兎角ニ学トイヘバ義理ヲミガカネバナ
ラス、学ノサシ向ニナツテ有ルゾ、サレドモ其中
ニ何ノヤクニモタハヌコトヲ詮義スルハ、致知
ノ方デハナイ、サシアタリ親アルモノハ親ヘノ
孝ノシヤウ、臣タルモノハ忠義ノ吟味、兎角サシ
アタリタル処カラ吟味シテユクガ致知ノシヨウ
デ、則チコレガ*近思ノ旨ゾ、近思ノ旨ハドコ
マデモ始終貫テアルゾ、タトヘバ書ヲ読ムト云
テモ、三体詩ノ詮義*杜律ノ吟味ナドハセデモ
事カ、ヌ事、小学四書六経ナドノ必至トヨマデ
カナハヌ、吟味セデナラヌ書ガ有テ、マヅ素読
ヲシテソレカラ訓詁ヲ吟味シ、義理ヲ講究スル
ト*イフ様、次第次第ニ推シテユクガ致知ゾ、
致知ノ学ハ天地万物何デモ詮義セザル事ナケレ
バ、コレホド広いコトハナケレドモ、其中ニ自
カラ次第階級ガ有テ、マヅサシ向(8) コレカラ
吟味セネバナラヌト云事ガアル、コレヲ知ルモ
亦致知ユヘ、何ノトリヒロゲタ事ハナヒゾ、致
知ノ学デ本法ノ目鼻ノアク事故*究テ大事ゾ、

サマグルー織田本—
サマを狭間に作る。狭
間ははさま。サマグル
ルははさまの下をくぐ
り抜けて退げる意。な
お解説で述べる。

セタゲドリ—織田本—
セタケとする。セタゲ
がよい。セタケドリは
下をせたび挿取する
意。なお解説で述べ
る。

コレ已ト云—織田本—
コレヲ已ト云ゾと記
し、已にワタクシとよ
みをつける。

ヘハリデー内田本・織
田本ヘバリテとする。
是とする。

ソレ其—内田本はソレ
を欠く。あるほうがよ
い。

似セノ—内田本同じ。
織田本—似セモノに作
る。

第四目〔克己〕

朱子曰、此巻改過遷善

ココガチガヘバユクトシテチガハヌ事ヘナヒ
ゾ、然レドモ又何トゾ立身ヲシタイ、⁽⁸⁾御前ノ
様子ガヨイヤフニシタイナドト思フト、至極忠
義ノ筋ハ知テ居テモ、何時⁽⁹⁾ *サマクグルヤフ
ニナラフヤラ、⁽¹⁰⁾長田ニナラフヤラ、⁽¹¹⁾赤松ニ
ナロフヤラシレヌゾ、親ヘノ事ヘヤフヲヨク知
テ居テモ、家事ヲ我儘⁽¹²⁾ニ早クシタイト思ヘ
バ、ドウナロウモシレズ、人君ノ政務ノ筋ハヨ
ク合点デモヲゴリタヒ意ガワヅカニアレバ、何
時⁽¹³⁾下ヲ *セタゲドリニシタイト云ニナロフヤ
ラ、家老ガウツトシフテ出頭人ヲトリアゲトフ
ナロフヤラ、姪乱ニナラフヤラ、酒池肉林ガ出
ルヤラ知レヌゾ、*コレ已ト云、已ト云ハ面々
ノ身ニ *ヘハリデ覺ノ有ル疾ヲ云、*ソレ其已レ
ガ私ヲ我ト克ク去リテ、⁽¹⁴⁾ミガイタ義理ノヤウ
ニ根拔ニナラネバナラス、義理ハミガキテモ、
我ト力ヲ入テ私ヲ克⁽¹⁵⁾去ラネバ、何ホド知テモ
本法ノ知ニハナライデ、却テ知ツタダケニカザ
リガ出テ、*似セノ一チ上手ニナル事ゾ、ソレ
故

〔克己〕ト立テテ、⁽¹⁶⁾義理ノ根拔ニナル功
夫ハ、全クコレニアルゾ、私ニハ二通⁽¹⁷⁾有

克己復礼。

近思錄の原本は此の巻
を第五巻とする。強齋
の十四目講義は、敢え
て第四に置いたのは意
味がある。克己の工夫
のないところに眞の存
養はないと、存養の前
に克己の目を挙げたと
ころに強齋字の特色が
ある。なお解説と余論
の項で付説する。

オレハカフオモフ—
内田本・織田本—オレ
ハカフ云事ガスキジャ
ノキライジャノに作
る。

カツテカツテ—織田本
—勝テ勝テ勝テヲラス
ル事ヲ云故に作る。

我ト我デニカツ事ニヘ
—織田本—吾ト吾手ニ
克ツ事故ニ作る。

働ヲスルトモ—内田本
—織田本—働ヲスレド
モに作る。

得タイデー—織田本—
得立イデに作る。

〔私〕私意ト私欲ト也、私意ハ *オレハカフ思フ
ノ、我慢⁽¹⁸⁾ナノ、意地ガワルイノ、ネタム
ノ、ソネムノト云ヤウナ事ゾ、私欲ハ色ガ見タ
イノ、声ガキ、タイノ、旨イモノガクヒタイ
ノ、遊ビタイノト云ヤウナ事ゾ、内カラ云ヘバ
私意、外カラ云ヘバ私欲デ、私意アレバ必⁽¹⁹⁾私
欲アリ、私欲アレバ必私意アリ、二ツノモノガ
常ニハナレヌゾ、面々ニ察シテ見レバ、人ハ不
知⁽²⁰⁾シテ⁽²¹⁾面々ニ覺⁽²²⁾ノ有ル事ゾ、ソレヲ
ソレナリニシテオイテ学ヲスルハ、病ノ根モ、
カズンテ補藥ヲ吞⁽²³⁾井底⁽²⁴⁾ノ泥モサラヘズシ
テ上水⁽²⁵⁾ヲカヘルヤフナモノ、根ヲヌカヌ功
夫デ、何ノヤクニタ、ヌゾ、然ルニ根ヲヌクト云
ニナリテハ、大力量ヲ用ネバイカヌ事、ソレデ
此⁽²⁶⁾克⁽²⁷⁾ノ字ガ嚴⁽²⁸⁾ク力量ノ入ル字ゾ、敵ニカ
ツト云モ和談シテヤムヤフナ事デハナヒ、此方
⁽²⁹⁾カラサキヲドコマデモセメツケテ、再ビ頭
⁽³⁰⁾上ゲフ様モナイヤウニ根ヲタチ葉ヲカラス
ト云様ニ、*カツテカツテカチヲラセル事ヲ云
故ソレホドノ大力量デナケレバイカヌ事、ワキ
テ我ニ⁽³¹⁾コベリツイテアル病ニカツト云ハ、タ
レヲ相手ト云事ナシニ、我ト我⁽³²⁾デニカツ事
ニヘ、大力量ヲ用ネバナラス事、古ヨリ猛將

根カラ葉カラ拔テユク
功夫ハ―内田本は、そ
の下の「ナラス事ゾ」
ウハベバカリデ根ヲス
カヌ功夫ハ―の部分
が無い。筆写の時の脱落
か。
根ヲヌカヌ工夫―織田
本―工夫を功夫に作
る。工夫と功夫―「功
夫、出ニ魏玉爾伝」。又
作ニ工夫。興成（注千
手旭出）按ズルニ思惟
ノ義トスルトキハ工夫
トヨム。程朱工夫效驗
ト毎々相對シテ云ヘル
工夫ハ用力ノコト。思
惟ノ義ニ非ズ。故ニ工
夫（コト）トヨムベシ。
と。（九州大学宋明思
想研究室刊『増補語錄
訳義』による。）

勇士ノ敵ニムカフテハ、見事ナ *働ヲモスル
トモ、我色ヲ好ムノ利ニツクト云私ノタメニ
ハ、⁽⁴⁾ 胴骨ヲ *得タテイデ見苦クナル事歴々
タル事ゾ、外ヲ相手ニシテカツ事ハナルモノ
ナレドモ、我ト相手ナシニ己レガ私ニカツ事
ハ、ヨクヨクニ志ヲフルイテハ、ゲシク力量ヲ用
ヒネバ、 *⁽⁵⁾ 根カラ葉カラ拔テユク功夫ハナラ
ヌ事ゾ、ウハベバカリデ *根ヲヌカヌ功夫ハ、
サシアタリテハ病ガ見ヘヌ様ナレドモ、何時デ
モハエ（生）出ル病根ハモツテアルゾ、ソレデ此
克己ノ功夫ガタ、ネバ義理ノ根ヌケノ正真ニハ
ナラスゾ、人君デイヘバ唐玄宗ナドノヤウニ、
初ハ貞観ノ政ヲ復スルヤウニ有テ、宮女ヲ出シ
タリ綾羅錦繡ヲ焼タリ、見事ナ事ナレドモ、後
ニハ楊貴妃ニ溺レテ、唐朝ナラシテノ大ヲゴリ
モノニナリタ、トント前トハ二人ノヤウニ見ユ
ルガ、後ニワルフナリタデハナイ。⁽⁶⁾ 即位ノ初
ハタシナミテ病根ガ見ヘナンダモノ、後ニ彼病
根ガ発（⁽⁷⁾）テアノ如クニナラレタ事ゾ、臣タル
モノデイヘバ、マサカノ時ハ御馬ノ先デト云ハ
ヌモノハナケレドモ、彼根ガ拔（⁽⁸⁾）故ニ、ワヅカ
ナ不足ガ種ニナツテ、長田ニモ赤松ニモナル

ナラス―内田本―ナラ
ズに作る。

マイスゾ―内田本同
ジ。織田本―マキスゾ
に作る。

重ガ有テ―織田本―量
に作る。是とする。
イヤハ―織田本―イヤ
ナハに作る。是とす
る。

ゾ、コ、ヲ拔ネバ忠義ノ吟味モヤクニタ、ヌ、
兎角何デ云テモ、コノ根ヲ克去克去（⁽⁹⁾）セデ
ハミガク義理モ根拔ニ *ナラス、何時デモ乱臣
賊子トナルヤウニ種ヲモツテ居ルゾ、ソレデ致
知ニ對シテ力行ト有ベキ事ナレドモ、克己ト有
ハ⁽¹⁰⁾コレカラ拔テユカヌ力行ハ表向バカリデラ
サヘテオクユヘ根拔ニナラス、タトヘバ先ヅ⁽¹¹⁾
五百戒ヲタモツホド力行ハナケレドモ、口ガア
レバ喰タシ、目ガアレバ見タシト底ニヲボヘテ
居ル病ガアラバナントセフ、ソレヲ不拔ニ表デ
オサヘタ分デハ、如在ナフテ *マイスゾ、今日
誰トテモメンメンニ飲食スルロモサモシイ病ノ
覺（⁽¹²⁾）アリ、妻子ニ向ヘバアマヤカシタイ病ガ
底ニ有ゾ、ソレヲ其儘⁽¹³⁾イケテオイテハ、イツ
マデモ我身ガ義理ノ似セモノニナル、ソレデコ
、ガ似セニナルカ正真ニナルカ禽獸ニナルカ人
ニナルカノセトニナツテアル、何デアレコ、ニ
カラ用フルトキハ、先ヅ君子仲間ト云モノゾ、
然レドモドフ云ガ私ジャヤラ公ジャヤラ、ドウ
云ガ孝ヤラ不孝ヤラ、忠ヤラ不忠ヤラシラネバ
セフ事ガナヒ、知ニモ *重ガ有テ、知（⁽¹⁴⁾）ダケホド
ニ力量ガ出ルモノ、惡ノ *イヤハ毒蛇ノヤウニ

両翼ノ如ク—内田本・織田本—ツバサノ如クに作る。

ヤクニ—織田本—ヤクニモに作る。

ウバカカ—織田本—姥カ、デモに作る。姥と嫌のことで無知な者のたとえ。

子共—織田本—子供に作る。

イヤトモヲ、トモ—内田本—ヲ、トモを欠く。

何レ—織田本—何レニに作る。

第五目 存養

朱子曰、此卷存養。近思錄は第四卷に置く。養ハ—内田本・織田本—養ハノ下イットナシニの五字が入る。そのほうがよい。病—内田本・織田本—疾に作る。

知り、善ノヨイハ、飲食ノヤウニ知ラバ、去レ悪求レ善、力量ガソノ様ニ出ル筈ゾ、ソレデ致知カラデナケレバ、筋モミヘズ、力量モ出ヌ、⁽¹⁾此ニツハ鳥ノ⁽²⁾、⁽³⁾兩翼ノ如ク、⁽⁴⁾兩端ソロハネバナライデ、先後ノツイデ自カラ不レ可レ乱、コレガ聖賢ノ發明デ立ラレタデモナク、深イコトデモ高イコトデモナヒ、学ト云ヘバ、先ヅ義理ヲ吟味セネバ、目ガアカズ、目ハアイテモ私ヲ克⁽⁵⁾去ラネバ、何ノ⁽⁶⁾ *ヤクニ立ヌ、カフ云事ハ唐デモ日本デモ古デモ今デモ聖賢デモ *ウバカ、*子共デモ *イヤトモヲ、トモイハレヌ事、サテ此ニツノ中カラ存養トアルハ、コハガ聖賢ノ大事ノ目当ゾ、此十四目 *何レヲロカハナレドモ、⁽⁷⁾此三ツノ立ヤウノワケガ、孔孟以来程朱ノ学ノ正統正脉ジヤト云事ガコ、ニアツテ、存養ハマン中ニアルハ、致知ノ次ニ存養、存養ハ次ニ克己ト次第シタ事デハナヒ、先ヅ

〔存養〕

ト云ハ、存ハ心ノウセヌヤウニ、平生心ヲトリシメトリシメスルコト、*養ハソコネヌ様ニソタツル事ゾ、人ノ心ノ⁽⁸⁾病ハ覺ヘナシニ放レ散テユクト、⁽⁹⁾生⁽¹⁰⁾ノマ、ノイミジイタツトヒモノヲ、イツトナシニ自情落ニサモシフ

ヤスレバ—織田本—マスレバに作る。内田本キハムルヤ、と切つてスレバとつづく。これがよい。

モフ氣—織田本—モウ氣に作る。妄氣である。

色ヤラ声ヤラ内田本・織田本—声ヤラ色ヤラ覺ヘナシニナリテユクに作る。

ナルゾ、ヤスイコト—楠本本・内田本はナルゾで切つてよむが、これはナルゾヤスイコトで点をうつほうがよいと思う。なお織田本は、行儀に作り、織田本行義に作る。

ノイレバ—内田本・織田本—シテイイレバに作る。是とする。ソフナツテ—内田本・織田本—サフナフテに作る。サフナフテはそうでなくては。織田本を是とする。

イヤシフモチクズスモノユエニ、ソレヲ氣ヲツケテウセヌ様ニ、自情落ニモチクツサヌ様ニ、平生ソダテルヲ存養ト云、何程義理ヲ磨キタイト思フテモ、ウカウカトワルフ持ナシタ心デハ、義理ハミガカレヌゾ、タトヘバ咄⁽¹¹⁾一ツデモウカウカトシテハキコヘヌゾ、マシテ聖人ノ書ヲ読⁽¹²⁾義理ヲキハムルヲ *ヤスレバ存養カラデナケレバ、致知モナラズ、私ニ克⁽¹³⁾タント云テモ平生存養スル身カラコソ、ワヅカニ色ト云 *モフ氣ガ付テハ克去リ、声ト云モフ心ガ付テ克去レタモノゾ、平生ウカウカノ心デハ、*色ヤラ声ヤラヲボヘナシニユク、其覺ヘナシカラ声色ニ淫溺スルニハ *ナルゾ、ヤスイコト⁽¹⁴⁾上下⁽¹⁵⁾着テ *行儀ニシテ居ルモノニハ、自情落ナ咄モナラヌヤフナモノデ、兎角平生心ノ駒ニ手綱ヒキシメヒキシメ *ノイレバ、私意私欲モオコル透間ガナシ、発ツテカラガ⁽¹⁶⁾ハヤ氣ガツイテ克去ルニ力ガ出ヤスイゾ、*ソフナツテウカウカトシテ居レバ、イツ欲ノ深イ身ニナツタヤラ、色ヲ好ム身ニナツタヤラ、不レ知不レ覺ゾ、ソレユヘ平生此身ヲ自情落ニ持⁽¹⁷⁾ナサズ、カリソメニモソデナイ事ニタヅサハラヌ様ニ、

氣力云々—織田本—氣
力モ皮膚モ顔色風采モ
全ウテ作る。是とす
る。

トリシメトリシメスル事ゾ、ソレナリニ義理ノ
詮義ハ致知ノウケトリ、何ゾヤマイノ端(ハ)有
テ、克去ル筋ハ克己ノウケトリデ、存養ハ全体ヲ
貫キテ本領地盤ノ工夫ゾ、存養ノ身カラスル致
知、克己ト知ルベシ、義理ノ吟味デハ致知ト名ガ
ツキ、私ニ克己上カラハ克己ト云、何ト名ヲツ
ケズ本領全体ノ工夫ハ存養ト云、兎角存養デナ
ケレバ義理モ我身ノモノトナラズ、一旦感激シ
テハ私ヲ克去ル事モ有ベケレドモ、根カラ變化
スルハダヘハエマイゾ、タトヘバ疾ヲ見テ何ト
見付ルハ致知デ、藥ヲ用イテ邪氣ヲ去ルハ克己
ゾ、然レドモ平生養生ガナイト邪氣ガ去テモ大
格ノハダヘガドフヤラヨハイ生レ付ジャト云様
ニミヘテ、何時イカ様ナ邪氣ガ入、フヤラ疾ガ
オコロフヤラアブナイモノゾ、平生養生ガヨケ
レバ何トナク、*氣力皮膚顔色風采邪氣モ自カラ
入リソムナヒ様ニ、少々ノ邪氣ナドハ云ニモ足
ラヌ様ニアブナゲモキヅカヒゲモナヒヤウニ、
我カラモ覺ヘ人カラモ見ユル、長度(ちどろ)ソレト
同ジ事、兎角存養デナケレバ、(5)義理ノホゾ落ニ
ナル事ハナイゾ、ソレデ(6)胸中ニ立テ兩端ヲニ
ナフテ居ルゾ、存養ヲツヅメテイヘバ敬ハ一字

小分—織田本—小割に
作る。小分、小割とも
に、為学の仕様の目の
三者、致知、存養、克
己をさしている。
第六目 家道
朱子曰、此卷齊家之
道。
其—楠本本—其字がな
い。織田本によって補
入する。

デ聖学始終ヲ貫ク本領ゾ、ソモソモ惟精惟一ハ
心法ヨリ打タツテ聖々相伝ノ要皆此一字ニ有ル
事ゾ、コレマデデ(7)為学ノ*小分ハ残ル所ナイ
ゾ、

〔家道〕 ト云ハ、(1)家ナリノ道ト云事、我身ヲ
修ルハ存養致知克己デ尽テ、家ハ即チ親戚妻孥
眷属ノアツマル所デ我ガ身ノ居ル所接ル所身ノ
実行ノ立ツ所ゾ、家ト我身トハ離レヌモノ、家
ト我身ト相手ドリテイル、親子トイフモ、* (2)其
片相手ハ我、夫婦ト云モ其片相手ハ我、兄弟ト
云モ其片相手ハ我、残り皆同ジ事、スレバ、(3)身
ヲ修ルデナケレバ家ニ処ルノ本ガナシ、(4)家道
ガタハネバ身ノ実行ガ見ヘヌゾ、ソレデ修身ノ
学カラ受ケテハ家道ゾ、コノツナギガ大事
ゾ、父子カライヘバ慈孝ノ道アリ、兄弟カラ云
ヘバ友弟ノ道アリ、一門カラ云ヘバ睦イ道ア
リ、夫婦カラ云ヘバ閨門タダシキ道アリ、コレ
ガ家道デ其片相手ハ我身ニヘ、身ヲ修ルニ本ツ
イテ家道トツナグゾ、サテ我身ハ天下ノ恩沢ヲ
受ケテソダツタモノデ、天下ノ人ト(5)人ドシモ
チ合テ居ルモノナレバ、(6)此方ガスンダホドニ
余所(ニ)ハカマハヌト云義理ハナヒ、ソレデ修

ユタカナケレバ―内田本・織田本―ナケレバをナレバに作る。是とする。

出テ仕ルニモ義アリ―この下内田本・織田本は退テ処ルニモ義アリノ九字がある。是とする。第七目 出処

朱子曰、此卷出処進退辭受之義。

熱キニモ―内田本同じ。織田本―熱氣ニモに作る。また寒にヒへとよみをつけて、寒ニモタラヌとなつてゐる。楠本はタタラヌの四字を欠く。四字がある内田本・織田本を是とする。よつて今タタラヌの四字を補入する。

慎所之―織田本―慎取レ之に作る。否である。易鼎卦九二爻辭に「鼎有レ実」と。伊川易伝に、「慎所レ之也」と。楠本はこれによつてゐる。

己治人が学ハ全体デ学ブトコロガ、*ユタカナケレバ出テ仕ルガ天下君臣ハ大義ゾ、然レドモ*出テ仕ルニモ義アリ、コ、ガ

〔出処〕ノ吟味ゾ、義ナシニ出デテ仕ルハモトヨリ義ヲハヅカシムルト云モノデ、義ナシニ退テ処ルモ亦君臣ノ義ヲ失タト云モノ、サレドモ進デモ退テモ *熱キニモ寒ニモ(タ、ラヌ)

人間ニ此吟味ハカ、ラヌゾ、ソレデ家道マデデ己ニ学ビ得ル事余リアツテ、其上ニコノ吟味

ゾ、(2)鼎有レ実*慎所レ之ト云ガコ、ノコトゾ、孔孟ヤ程朱ノ出処ヲ見ルニ凜然トシタ事ゾ、

コ、ガチガヘバアトニイカヤフノ事業ガ *有テモ、ナンノ詮ナキ事ゾ、小節ニカカハラズ大業ヲ

タテタガヨイト云ハ、(3)枉レ尺而直レ尋ノ*事デ、世俗ノ利ヲ計ル算用ヅクノ事デ、君子ノイヤシ

ム事ゾ、サテワヅカニ己レヲ枉レバユクトシテマガラヌ事ハナヒゾ、(4)真西山ナドノアレホド

ノ人ナレドモ、アタラ道具ノウヅモレン事ガドコト云事ナク惜シウテ、(5)史弥遠ガ様ナモノ、

取持デ仕ヘマジキアル理宗ヘ仕ヘラレタ、大学衍義ヲス、メラレタモコノトキゾ、随分心ヲ尽

サレタレドモ、大格ガ出処ノ大義ヲ失ハレタ残

則ナリ―内田本・織田本―ノリゾに作る。ソレガ―内田本同じ。織田本―ソコガに作る。

ワケアツテノ―織田本―ワケノ有事デノ事に作る。否である。

中国―内田本・織田本―九州に作る。

酒―内田本・織田本―酒ヲに作る。

念ナ事ゾ、(6)李燔ハ何ト招レテモ出ラレナンダ、大ナル *則ナリ、流石(7)ニ朱子ノ高弟ト云テハデヌゾ、コ、ガ出処進退ノセトノ処デ、キハメテ大事、コ、ガタガフトアトモサキモ皆失フゾ、朱子行状ヲ見ルニ、仮初(8)ニモ官職俸禄ト云トナミノ事デハウケラヌゾ、*ソレガメツタニ潔白ニスルデハナイ、皆 *ワケアツテノコトゾ、カ様ナ処ニ目ヲツケテ則トセフ事ゾ、カ様ノ処ガ身ヲ立テ道ヲ守ルハ(9)大ガネゾ、元ノ(10)許魯齋ナドハ人柄ハ見事ナモノ、朱子ノ学ヲモ学ンデ、愛ニ小学ニ如ニ父母ニ尊ニ近思録ニ如ニ鬼神ト云タホドノ者ナレドモ、*中国ノモノデアリナガラ、夷狄ニツカヘ、一生ノ大義ヲ失テ何ノヤクニタヌ、(11)陶淵明ハ平生ノ身持ハ頭巾デ *酒漉シタノ、酔テハ北窓ノ下ニ臥タノト云様ナ放蕩タルナリ、ナレドモ(12)劉裕ニツカヘナンダ大節吟咏ノ間ニモアラハレテ、其高風凜々トシテ(13)伯夷以来ノ一人ゾ、サルホドニ(14)通鑑綱目ニモ(15)晋処士陶潛卒ト大書ナサレタ、死ナレタハ宋ノトキナレドモ、晋ノ処士トアルゾ、晋ノ臣タル名義ヲ失ハズキツケズ、終ラレタユヘ晋ノ処士トハイフコトゾ、惣ジテ

第八目 治体
朱子曰、此卷治國平天下之道。

処士ト云ハ⁽¹⁾浪人ノ事ハ云ハヌヲモ重イ事ゾ、出処ノワケヲ立タ人デナフテハイハヌ事ゾ、サテ出テ仕ヘテ仕置ノ詮議ナレバ治体治法ニ有ル事ゾ

〔治体〕ハ、⁽¹⁾仕置ノ⁽²⁾ダタイノ⁽³⁾骨ガラミヲ云、何デモ骨ガラミノナイ事ハタ、ヌモノ、況ヤ天下国家ヲ治ルヲヤ、タトヘバ天下ノ法ハ朝廷ヨリ出⁽⁴⁾ゾ、朝廷ハ人君ノ身ニ本ヅク故、人君ノ身ヲタダサネバ、朝廷ヲタダソフ様ナシ、朝廷ヲタダサネバ、天下ノ法ノ立ヤフハナイト云ヤフナガ治体ゾ、一事一事デ云ヘバ、百姓ハソダツヤフニメグムト云ガ骨ガラミニナツテ、年貢賦役ノ法トナリ、挙賢用才ガ骨ガラミニナツテ、官職俸禄ノ法トナル、家老ハ大処ニ目ヲツケテ瑣細ナ事ハセヌ、内証ニツカハル、者ガ表向ノ事ニサシ出ル事ハナラヌト、⁽⁴⁾紀綱ヲ立テ名器ヲ重ンズルヤウナ事ガ、皆治体ニカ、ルゾ、其仕置マヘニナツテハ、

〔治法〕ノ事ゾ、法ト云ハ⁽¹⁾時々出来合デナシ、トコロドコロデクルイナシニ、天下一統ニ一定ノ則ガ立ツテタガヘラレヌヲ云、冠昏喪祭ノ礼デモ、⁽²⁾律度量衡ノ制デモ、⁽³⁾參勤交代ノ

取―内田本はここで切る。それに従う。

第十目 政事
朱子曰、此卷処事之法。

第十一目 教學
朱子曰、此卷教學之道。
犯ス―織田本―ヲカスとかながきに作る。

限り、出仕進退ノ時取ル、衣服ノ染色、器物ノ度数道具ヲサキニ立テルトアトニ立ルト云ニ至ルマデモ、コトゴトク法度ガ立テ有テ天下一統ニバラバラニナヒゾ、学校ノ教デモ国々処々デカハルト云ハ法ガナヒユヘゾ、後世⁽⁴⁾宗門改メノ様ニ吟味有テ、小学大学ノ教ノ外ニカハリタル事ヲトナヘレバ、⁽⁵⁾造言ノ刑乱民ノ刑デツミセラル、コレガ⁽⁶⁾仕置ト云モノ、コレデ天下ヲ一統ニスル事ガナルゾ、治体デナケレバ治法ガタ、ズ、治法デナケレバ治体ガ一統ニ行ハレヌゾ、コレニツデ政ノ本末ソナハルゾ、

〔政事〕ハ面々ノウケマヘノ役目ノツトメヤフノ事ゾ、治体治法ハ上ヨリ立ツ⁽¹⁾全体ノ仕置ノ本末デ、ソレヲウケテ⁽²⁾ツトムル役前カライヘバ政事ゾ、サテ仕置ノ全体トツナギ合⁽³⁾モノガ教學ゾ、

〔教學〕ガ立ズシテ、⁽¹⁾仕置計⁽²⁾デハ、タトヘバコ、ニハ親ヲ殺シタハ、兄弟⁽²⁾公事⁽³⁾スルハ、⁽³⁾夫ヲ犯ス妻ノアルハト云事ガヤマヌゾ、勿論首ハネテコラスト云ハ仕置ノ定マリナレドモ、ソレハ飯ノ上ノ蠅ヲ逐様ナモノ、イツ迄モヤム事ナケレバ、風俗トトモニウルハシウ

第九目 治法
朱子曰、此卷制度。

ワヅカニ—織田本—纒
ニに作る。

出テコフモ—織田本同
じ。内田本出テモフモ
に作るは否。

第十二目 警戒

朱子曰、此巻改過及人
心疵病。

警戒—内田本・織田
本—警戒ハヤレに作る。

戒—内田本・織田本—
戒ハに作る。

自忠信至喪邦—内田本
一言以興邦一言喪邦の
十字が無く「聖恩思作
狂、狂能念作聖」の十
字が入る。織田本—忠
信以下以喪邦に至る二
十二字無く「聖恩思作
狂、狂能念作聖」の十
字が入る。

第十三目 異端

朱子曰、此巻異端之
学。

モノユヘ—織田本—モ
ノハに作る。

ナルシルシハツカヌゾ、⁽⁴⁾其段ハ平生義理ヲ教

ヘ人倫ヲ明メサスル様ニスルデナケレバユカ

ヌ事、ソレデ治教ノ二ツハイツマデモハナレヌ

ゾ、ソレデ治体治法政事ノ次ニ教学トウクル

ゾ、コレマデデ修己治人ノ道残ル処ナクソナハ

リタガ、⁽⁵⁾ワヅカニモフヨイゾト云ト

油断剛敵、何ガ^{*}出テコフモ知レヌユヘ、ドコ

マデモ勝テ胃ノ緒ヲシメヨト全体ノクサビトシ

テ、

〔警戒〕 ト有ルゾ^{*}警戒ハヤレウカトスナト氣

ヲツクル事ゾ、^{*}戒コ、ヲハナレナコ、ヲ失フナ

トイマシメタモツ事、コレハ教学ノ次ヲウケテ

警戒ト云事デハナイ、己ヲ修ルカラ、云テモ、

人ヲ治ルカラ、云テモ、全体ヲラヌイテ用心ゾ、

⁽¹⁾禍生ニ於懈惰ニト云、⁽²⁾其亡其亡係ニ包桑ニト云、

⁽³⁾忠信以得レ之驕泰以失之ト云、一言以興レ邦

一言以喪レ邦ト云モ、皆コ、ノコトゾ、モハヤ

コノ上云ハウ様モナイガ、又

〔⁽¹⁾異端〕 トアルハ、道モ学モ政モ、大根^(おき)

カラアヤマラス^{*}モノユヘ君父ノ讐ノ如ク甚ダ

悪ムベク、声色ノ如ク甚ダ恐ルベキモノゾ、ソ

レデ⁽²⁾道学ノ讐敵^(あだかたき)トシテ弁闘スルガ学者全

第十四目 聖賢
朱子曰、此巻聖賢氣
象。

此十四目ハ—織田本ハ
ここから改行する。そ
れに従う。

立フデモナイガ—織田
本—立様デモナイガに
作る。

学道次第—織田本—学
道ノ次第ガに作る。

強斎先生以下—織田本
によつて記す。

体ノ任トナリテアル、サテ一^(おき)ノ終ニ

〔聖賢〕 ト有ハ、全体ノ目当ゾ、⁽¹⁾道ナリニナ

リ得サセラレタガ聖、道ナリヲ守ラレタガ賢ナ

レバ、凡学レ道者ノ目当帰宿ハコレヨリナヒゾ、

卷頭ハ道体、卷軸ハ聖賢デ、道体ナリハ人カラ

イヘバ、聖賢、聖賢ナリハ本然カライヘバ、道体、

卷頭卷軸天人一貫ゾ、

^{*}此十四目ハ、朱子ハ是非共カフ、^{*}立フデ、モナ

イガ、自然ニ、^{*}学レ道次序ガカフヨリ外ナヒナリ

ガ十四目トハ、ナツタゾ、此目ノコマカナ詮義ハ

本篇ニナリテノ事、ソレデ十四目ハ三綱八目ノ

ヤフナモノ、本篇ハ伝文ノヤウナモノ、ソレデ

十四目ノワケヲ講究スルガ大事ゾ、

^{*}強斎先生延宝七年己未七月八日生享保十七年

壬子正月六日終享年五十有四歳

(4) 解説・余論

〔前論〕—(1)朱子ノナニト題セフゾ—近思録の題号は、朱子が「是ガヨカラフト云ヤウナ」いい加減な態度でつけたものではない。近思と題したのは、必ずそうしなければならぬ理由が有つてのことである。余論—享和本に曰く、兎角学ハ己ガ身ヲ離レズ日用彝倫ノ間ヲ離レズ切近着実ニ工夫ヲナス外ナシ。(中略)四先生ハ孔孟ノ道ヲ万世ヘ伝ヘ導ル開山ジヤガソノ真髓全ク此ノ二字(注、近思)ニ有ル事ナリ。本方(注ほんもの)ノ学ガシタクンバ此ノ真髓ヲジカニ己レガ工夫トスルヨリ外ハナヒゾ。朱子モコレデ朱子ニナツタモノ故万世ノ学此ノ真髓真味ヲ己ガ工夫トセヨト云ハル、ハヨギナキ親切ナル思ヒ入レニテ題セラレタル事ナリ。此合点ナケレバ近思録読デモ徒然草読デモ同じ事也。シカレバ学バザレバソノトヲリ。学ブト云カラハコ、ヲヌカシテハナラヌ事、学者能々思フベシト。(享和本も織田本と同じように句読で切つてない。今解説上適宜句読点を入れた。)[近]—(2)サシアタリノ事—(差当)目前のこと。即ち身に近切な日用常行の孝悌忠信のこと。(3)全体ノサシアタリ—親子関係で云えば、目前なすべき全体のこと。父、父子親有りの親がそれに当る。一事一事ノサシアタリは、次の怡顔柔声、晨省昏定などがそれに当る。(4)怡顔柔声—顔色を和らげ音声を柔らかにする。眇庭柯—以怡顔。(婦去来辞)(5)晨省昏定—凡為人子之礼、冬温而夏凊、昏定晨省。在醜夷—不爭。(礼記曲礼上)醜夷は多くの同輩。醜は衆、夷は平、己と平等の義。(6)收放心—学問之道無レ他。求其放心而已矣。(孟子告子上)(7)ムクナリニ—向

くにりに、向くままに、道を離れることなく身に近切な学をすること。それが近思の義である。(8)ソコ心(底心)—心のそこで実心の義。実心から心掛けるのでなくて、心が隙になり学ぶところが身につかない。伊川の謂う内積忠信がそれである。(9)明メタイ—あきらめたい。明らかにしたいの意。(10)下学為己—「下学上達」(論語憲問篇。朱注に「程子曰、下学人事、便是上達天理」)、「古之学者为己、今之学者为人」。(憲問篇)(11)ワキヒラ(側辺)そばひら。かたわら。ワキヒラヲ見ルは放心のこと。(12)本法—本来の在り方。本来。(13)図ニノツター—思うつぽに入つたこと。(14)ロクナ子ニナリタイ—ロクは陸。陸はゆがみなく正しいこと。また物の正しいこと、まじめなこと。ロクナ子ニナリタイはまじめな子になりたい。(15)平易着実—道は平易着実の間に在る。(16)孔孟歿シテ後千五百年—邵州特祀濂溪先生祠記(朱子)に曰く、「自孟子至周程、則其晦者千五百年。而其明者不能以三百歳」。〔漢唐ノ間—近思録開齋序にも「漢唐之間、非無知者二也。」とある。漢唐の間の知者とは、董仲舒、韓退之を指す。この二人は近思録觀聖賢篇に挙げられている人物である。(18)ソノナリヲ—其の学び方をそのまま積累してゆくならば聖賢にもなり得る。(19)身ニ切ナ病—私意と私欲の二つである。(20)四子ノ階梯—近思録好レ看。四子六経階梯、近思録四子階梯。(朱子語類百五)四子は四書のこと。好レ看は看るに好し即ちよき書の意。(録)—(21)トリコシノ問答—先々のことをあれやこれやと思う。それは所謂近思の学ではない。余論—近思の題名は論語に取る。「子夏曰、博学而篤志、切問近思、仁在其中。」(子張篇)

また朱子は、「近思錄一書、無不切ニ人身ニ教中人病者」と言い、また「修身大法小学備矣。義理精微近思錄詳之。」（語類百五）とする。闇斎も亦その近思錄刊行の序に「此篇以近思之名、而極高妙之言、小学大学工夫悉備焉。」という。強斎はこの書を以て日常の守刀のごとくにし、「禄ノ為ニスル事モナク、名ノ為ニスル事モナク、本法ノ人タル身ニナリタイト」道を求めることの切なることを述べる。「ソノナリヲ積累セバ、ソノ地位（周子二程子張子四先生）ニ至ライデナントセフ」と言うは、朱子が近思錄後序に「誠得レ此而玩レ心焉、亦足以得其門而入矣」とするを承けるものである。「十四目論」——(1)綱領条目——大学の三綱領八条目。即ち明明徳、新民、止至善の三綱領と格物、致知、誠意、正心、修身、齊家、治國、平天下の八条目のこと。朱子注に「修身以上、明明徳之事也。齊家以下新民之事也。物格知至、則知所止矣。意誠以下、則皆得所止之序也」とある。(2)先師——強斎の師淺見綱斎。綱斎の師闇斎先生は、十四目を大学の三綱領八条目に見立てて大事にされた。綱斎先師もその通りにされた。

(3)白鹿洞揭示——朱子は淳熙六年十月白鹿洞書院を復建した。時に五十歳。書院はもと唐の隱士李渤が居たところ。文集に白鹿洞書院学規があり、呂東萊にも白鹿洞書院記がある。ここの揭示とは、学規を指す。「ノ如ニシテ」は、の如く大切にしての意。(4)非太刀——非難のこと。(5)水火寒熱ヲ変ゼヌヤウニ——義理をわが身に得ること。水は冷たく火は熱いは性。人為では変えがたい。義理を身に得て私意私欲にも変えられないようになるのが自得である。(6)義理精微——朱子語類百五近思錄

説法中の語。(7)儒者の納戸——納戸（なんど）は衣服調度を納める部屋。また家財物の供給所。故に納戸役は一切の経営を司るものこと。納戸役で一家は立つ。近思錄によつて人も人となり得る。(8)全体ノマカナイ——全体のいとなみ。余論——当舎修斎所録の強斎の語に「明明徳アノ一言ガ三綱領ノ又綱領ゾ。大学始終ベツタリト此ノ一字デ貫イテアル。明徳トイフガ、（それは）聖人ニアル明徳デ常人ニナイト云フコトデハナイ。聖人常人古今遠近コレニカハリハナイ。余所ヲ求メルコトモ外ヲサガスコトモナイ。銘々ノ身ガベツタリト明徳ノハヘヌキト合点スベシ。——大学ノ一番ニ明明徳トアルハキビシイ教ヘヤウデヤ。サテカウデ明ニスル工夫ノ筋カラ言ヘバ、我が身ガ明徳ノ病人ト合点スベシ。此ノ大格立ツテノ格物致知誠意正心ゾ。」と。わが身ガ明徳の病人と合点することによつて愈々以て身に近切な学となつて来る。故に近思錄を学者の納戸とし、「学ハ論孟近思ヲ用イネバ本法ノ物ニナラヌ。学ノ底ヲタハクハ近思ニ在ルコトゾ。譬ヘバ論孟ハ玄関大庁ノ類、近思ハ納戸ノヤウナモノゾ。至極ノツマリハ、納戸カラデナケレバ出ヌゾ。」（当舎修斎所録）とするとところに強斎の学を識ることができる。

十四目各論「一、道体」——(1)体段ノ段——三宅尚斎は、「明道之本然体段」とする。体段とするのは語類の説によると思われる。(2)前ヲクル事モ——以前を繰り返し将来を推し量ることが道体を見るのではない。道体は今の形を離れず然し形に落ちることなく見なければいけない。(3)形ナイナリノ形ガ形ナイナリノ形ハ形而上、それがと言つて下に結

ぶこの「ガ」が形而上と「形有ルナリノ形」即ち形而下を結ぶ大切な助詞である。(4)注ニ「朱子の周易本義の説。(5)消息―消えたと生ずると。(6)至極形ナイナリガ―理氣二元の妙合を説く。(7)沖漠無朕万象森然已具―伊川の語(遺書)、道体篇三三条に出る。奥深く静かに形もきざしもない中に万物の理は悉く備っている。無極而太極を説いたことば。(7)二ツノ手―織田本に二ノ手とするのがよい。二ノ手は二番手のこと。操(つぎ)芝居の手摺(つぎ)の三重に造ったうちの中間が二の手で本手三番手に対することば。(8)落チタリ―は下のノヤウニ思フにかかることば。(9)モメヤイ―モメ(揉)いさかい、葛藤。老子は「大道廢レテ有ニ仁義」というがそのようにして道が生じたと誤つて思う。(10)為学以下―織田本以学に作るは誤り。(11)朱子モ―朱子の説法に(語類百五)―近思録首卷難レ看とし、また看ニ近思録ニ、若於ニ第一卷ニ未ニ曉得ニ、且從第二卷ニ看起、久久後看ニ第一卷ニ、則漸曉得とある。(12)先師―浅見綱齋も二卷から講起した。余論―太極の動靜により陰陽二氣が生ずる。(太極図説) 易繫辭伝上に一陰一陽之謂道とある。これは陰陽の流行するところに道を認めたもので陰陽が道であるというのではない。先師内田周平先生は一タビハ陰一タビハ陽と訓ぜられた。先師は「陰ぎり陽ぎりでなく、陰が陽になり陽が陰になりて、天地開闢より万古はたらく。一たびく」と流行する。『周易繫辭伝講義』(哲学館講述本、筆者所蔵本)、朱子の周易本義に「陰陽迭運者氣也。其理則所謂道也」とあり、先師は尤も勝れた解とされた。曰く「陰陽云々朱子の此註尤もすぐれた註なり。この氣の字を入れて意味がまぎれぬ。本文の一陰一陽の一の字をかれこれ

言はずに迭といふが陰ぎり陽ぎりでない意なり」と。二、「為学」(1)本然カラ云ヘバ―明道は「論レ性不レ論レ氣不レ論レ性不レ明」(遺書、學篇)という。朱子は之を解し、孟子の性善は本然の性荀子の性悪は氣質の偏を云うもので明道と横渠が性と氣を併せ論ずることによって始めて性論は備ったという。張横渠は「形而後有ニ氣質之性。善反レ之、則天地之性存焉。故氣質之性、君子有ニ弗レ性者」とする(正蒙)。強斎は、本然カライヘバ火ハ燃ル。氣質カラ云ヘバクスボル。よつてクスボル火は必至トモヤサネバナラヌとする。必至トモヤサハ横渠の云う善ニ反レ之であり、これが氣質變化の学である。(2)生ツキ―生れてから後形によつて生ずる氣質の變をさす。面々のクルヒがある。(3)シタテナラシ―仕立直しの学は所謂氣質變化の学である。(4)ニジリモスジリモ―ニジリはにじる(疆)こと。おしつけてすり動かす。スジリはすじる(捩)。身を曲げてねじる。偏つてひねくれていること。(5)道体為学ト次第スル―道体の次に為学だとのように次第の上で論じてはならぬ。なぜならば、道体は全体を貫く本源の在るところで為学以下はそれを身にする工夫である。余論―小野鶴山(近思錄)も為学は「仕立テ直シ」であり、本然の通りに行かぬ人の通病を「本然ノ通ニ」仕立直す全体が学であるとする。曰く「人ノ身ハ氣ヲ以テ成ルモノユヘ形氣ノヒズミ(歪み)アルガ亦自然ノ理ユヘ、生レ付ニクルイヒヅミガ有テ其上見ルナリニ欲ガ起リ聞ナリニ欲ガ萌シ本然ノ通ニ行カヌガ人ノ通病」と。故に「人ト生レテ病(朱子は人心の疵病)ナイ者ナケレバ此学ヲ為ルト云事ガ是非セネバナラヌ徹底当リ前ニ成テアル故、

是ヲ当然ト云人ニ成ルカ禽獸ニ陥ルカノセトガコ、一ツニアルゾ。誠ニ血ノ涙ヲ流シテセネバ成ラヌ事ゾ」とする。刻苦以て仕立直しに従事すべきに、「ウカ／＼ト詩ヲ作り諸芸ヲ稽古シタリシテ居テハ指近イ処ヲ知ラヌ」者としている。周子も「彼以文辭而已者陋矣」(近思錄)とし、朱子は「欲人真知道德之重、不若溺文辭之陋也」としている。「三、致知」——(1)学ハ知ルカラデナケレバ——学は先ず知ることが出発である。大学にはまず格物致知を言い、朱子は居敬窮理の説を立てた。ただ朱子の説を先知後行などというと誤る。窮理は実践を伴うものであるが、先ず知ることが肝要。朱子には先後では知を先とし、軽重では行を重しとするの名言がある。(2)面々ノ料見——一己の料見には私が付著している。致知によつて何が善かが明かになる。(3)究メヌ事ハ——格物致知ノ学ニヨツテ究メナイコトニハ、(4)今井が栗津ノ——今井四郎兼平は義仲に従つて栗津で討死した。(平家物語九)主君の為に討死したことは立派であるが君を不義に陥し入れたことは自から知らぬ。強斎は行為の義に背くことをここで言う。(5)郭巨——後漢の人、元の郭居敬の立てた二十四孝伝中の人。食の不足に子を埋めてまでも親を養うことが却て大不孝であることに郭巨は気づいていない。(6)我料簡——推し究めぬ一己の料見。所謂師心自用である。(7)目ナリニ——磨いた目の見るまゝに、(8)御前ノ様子ガヨイヤフニ——御前はおんまえ。君主の前をつくらうこと。(9)サマククル——織田本狭間ク、ルに作る。さまははさま。城壁にうがって矢・鉄砲など放つ穴。ク、ルはくぐる(潜る)。物のすきまをすりぬける。こゝではくぐり逃げる意。奈良・平安

時代は「くぐる」と清音。しきたへの枕ゆくくる涙にぞうき寝をしける恋の繁きに(万葉四)。(10)長田ニナラフヤラ——さまくぐる人物の例、平治の乱に敗れた義朝は東国に逃れ再起せんと尾張国に辿りついた時長田忠致に暗殺された。忠致父子は後頼朝に誅戮された。(11)赤松ニ——赤松満祐のこと。室町前期の武將。將軍足利義政を自邸に招いて弑した。後細川持之に攻められ自刃して果てた。(12)下ヲセタゲドリニ——せたげ取る。虐取する。せめはたい取り立てること。唐船嘶今国姓爺に「年貢は一粒も残さずせたげ取り」と。人君も奢りたいという私意がつい下をせたげとるようになる。(13)ミガイタ義理ノヤウニ根拔ニ——病根即ち私意私欲が根拔になったこと。余論——致知は、大学章句經一章朱注に、「致推極也。知猶識也。推極吾之知識、欲其所知無不盡也」と。鶴山は「今日指当ル孝悌忠信カラ段々類ヲ推シテ天下国家万物万事ノ理ヲ窮メ尽スゾ。是ガ学問ノ手始め」とする。伊川は一物上一理あり。須く其の理を窮め致すべしとし、其の理を窮めることは多端なりとし「読書講明義理、或論古今人物、別其是非、或応接事物而処其当。皆窮理也」と致知の及すところを説く。「四、克己」——ただし近思錄では克己は第五篇。強斎は四目に説く。(1)義理ノ根拔——義理が根抜きになるのではない。私が根抜きになった義理。(2)面々ニ——他人は知らず自分自身に、(3)コベリツイテアル病——自身にこびりついている私意私欲。(4)胴骨ヲ得立タイデー——胴骨は背骨。所謂バックボーンのこと。背骨を立ち得ないで。(5)根カラ葉カラ抜テク工夫——私がすっかり抜けてゆく工夫。所謂根本寒源(左伝)的な工夫。(6)即位ノ初——

即位の初年は身嗜みで病根が見われなかった。しかし所謂私が根拔になつた義理の身ではないから後にはあゝした奢り者になつた。(7)コレカラ抜テユカヌ力行ハ―私の抜け去つた正眞の義理の身でなければ力行は行われぬ。で強斎は存養の前に克己を説いた。(8)五百戒―比丘尼の戒法、三百四十八戒であるが五百戒はその大数を言つた。(9)イケテヲイテハ―活かしておいては、(10)セフ事ガナヒ―いたし方がない。(11)此二ツ―致知と克己の二つ。(12)此三ツ―致知・存養・克己。余論―鶴山は、「私意私欲ニモセヨ、氣質ニモセヨ、義理ニ害ヲ成ス物ヲ引括ツテ己ト云フ。是ヲ生ケテ置イテハイツ迄モ義理ノ身ニハ成ラヌ。其ノ己ヲサラヘテ取ルヲ克ト云フ」という。己をわたくしと訓じまたおのれとも訓じ、おのれには義理の己れと私の己れがあるとしている。「此ノ己ガ義理ノ己デモアリ、私ノ己トモナル」として克己の必要を説いている。伊川は「大抵人有レ身便有ニ自私之理」。宜其與レ道難レ一。(二十二条案)。(五、存養)―近思録では存養は第四卷。(1)生ミノマ、―本然の性、性の善なるもの。(2)義理ヲ究ルヲマスレバ―義理を究ることを増益すれば、(3)上下着て行儀―身から正すことが必要。朱子は敬齋箴を作り「正ニ其衣冠ニ尊ニ其瞻視ニ」から説き出し先ず形を正すことを教えた。(4)ハヤ氣ガツイテ―私意が起つたとたん早くも氣がついて。(5)義理ノホゾ落―臆落。腑に落ちること。合点と承知。存養により義理もほぞ落になる。わが身のものになる。(6)胸中ニ立テ―存養は致知と克己の中間に在つて両者を荷うものである。存養がなければ致知も克己も成らぬ。(7)為学ノ小分―為学の仕様の目の致知存養克己をいう。余論―義理を

詮議する上から致知と言ひ、私を去る上から克己と言う。存養は致知と克己を貫く本領全体の工夫上から言う。存養は、ツツメテ云へバ敬ノ工夫ト強斎は言ひ、鶴山も存養ヲ一字デ云へバ敬ト云フとしている。存養の工夫が敬であることは宋学伝来の工夫である。三宅尚斎は、「敬ノ字色々ノ訓説アレドモ朱子ガ畏ノ字ヲ以テ説レタル是レ端的明白ノ説也。敬ノ字ハツ、シムト訓ジテ心モ身モ油断ナク念ヲ入レ、デツトヒカヘテ附クル合点也」(要説)とする。而してかゝる「存養畏敬尊奉ノ心立テテ学ノ本領頭脳ト謂フ。此ノ本領ノ心立タヌモノ何ゾ学ヲ論ゼンヤ」とする。「六、家道」―(1)家ナリノ道―ナリは成就する、斉うの義。鶴山も家道は家ヲ齊フルノ道ゾという。朱子はこの巻を齊家之道とする。(2)其片相手―家人の一方の相手は我。朱子は応事接物を大切に見た。而も敬の心を以て説いた。人客のいかに多くも敬を以て接るとした。「自朝至レ暮人客来不レ已、自家須ニ尽著テ接レ它」と。它是佗則ち彼の義。(3)身ヲ修ルデ―大学に修身齊家をいう。(4)家道ガタ、ネバ―大学に齊家治国平天下とあり、近思録は家道の次に出処を置く。(5)人ドシ―人同志。(6)此方ガスンダホドニ―自分だけを修めて他人は構わぬというのは眞の学ではない。余論―伊川は「正ニ倫理ニ篤ニ恩義ニ家人之道也」(易伝家人卦、家道篇五条案)。然し骨肉の間では、情が礼に勝ち恩が義を奪うから剛の道が大切だ。「惟剛立之人、則不_レ以_レ私愛ニ失_レ其理」、故家人卦大要以_レ剛為_レ善」とする。大学章句に「其家不_レ可_レ救而能教_レ人者無_レ之」(伝九)として齊家が本であることを言う。修己治人が学の帰宿であるが、吾が身であるもの、鶴山は「別々ニ成テ居ルデナイ。吾

ガ身カラ離レラレヌ」とし、強斎は「身ノ実行ノ立ツ処」で説いた。「七、出処」——(1)熱キニモ寒ニモタ、ヲヌ——織田本熱氣ニモ寒ニモとする。

いかなる迫害にも害されぬ意。(2)鼎有^レ実慎取^レ之——易鼎卦九二爻辭に鼎有^レ実と。伊川易伝に「鼎之有^レ実、乃人之有^レ才業也」と。然し「不^レ慎所^レ往、則亦陷^レ不義」。故曰、鼎有^レ実。慎所^レ之」と。(3)枉尺而直尋——「且夫枉^レ尺而直^レ尋以^レ利言也」。(孟子滕文公下)十二卷警戒篇には、伊川の語を引いて「較^ニ事大小^一、其弊為^ニ枉^レ尺直^レ尋之病^一」と。物事の大小を比較してやると小を軽んじ大を重んずる結果になる。強斎は小節とて軽んじてはならぬとする。(4)真西山——朱子再伝の碩学とも云われるこの人を、強斎は「大格ガ出処ノ義ヲ失ハレタ残念ナ事ゾ」とするはなぜか。それは「史弥遠ガ様ナモノノ取持デ仕ヘマジキワケアル理宗ヘ仕ヘラレタ」ことにある。(5)史弥遠——寧宗崩後、偽って詔と称し、皇太子竑を廢し理宗を立てた。真西山(名德秀字景元)は慶元五年進士、累官して嘉定五年起居舍人となった。かく寧宗の知遇を得た人物であるのに寧宗の本意に非る理宗に仕えたのは「出処ノ義ヲ失レタ」とする。強斎先生雜話筆記(卷十)に、「我ニ得^ニタ所ガアレバソレヲ何トゾ事業ニ及ボシタウナツテ来ツ。何トゾ道ヲ行ツテ見タウナツテソコデ出処ヲソコネルモノデヤ」とする。(6)李燔——宋の南康建昌の人。字敬之号弘斎。朱子の門人。朱子曰く「南康敬子ヲ得テ便チ氣脈断絶ニ至ラザルヲ覚ユ。将来望ムベキモノアリ」と。朱子歿し、時に偽学の禁甚だ厳にして朱子の会葬者時政を論難するを恐れ嚴重な監視が行わた中で李燔は同門を率いて会葬し少しも憚らなかつたという。伝は宋史

四三〇道学、宗元学案六九にある。(7)大ガネ——肝要な点。(8)許魯齋——同時代の劉因は一時元の徵辟に応じたが間もなく辞し処士を以て終った人で靖献遺言に載る人物。許魯齋は本土の者でありながら、「夷狄(元)ニツカヘテ一生ノ大義ヲ失ツタ」と強斎は非難する。(9)陶淵明——東晋の義熙元年(五)淵明は致仕して園田に帰去した。後、劉裕は東晋を滅し宋を建て武帝と称した。後、淵明は召さるゝも出仕を肯んじなかつた。靖節先生と謚される。(10)劉裕——東晋の安帝を弑し恭帝を立てゝその禪を受け宋を建てた人物。(11)伯夷——弟叔齊とともに殷の孤竹君の二子。周に仕えず節を全うした。綱斎の靖献遺言には、其の読史述夷齊章と淵明には帰去来辭が載せられる。(12)通鑑綱目——朱子は資治通鑑(宋司馬光撰二九四卷)により別に義例を作り綱と目に分けた。綱を経目を伝とした。綱は褒貶の微意を寓する。目は門人趙師淵が修綴した。五十九卷。(13)晋処士陶潜卒——通鑑綱目には晋徴士陶潜卒とあって、靖献遺言に晋処士陶潜卒とある。こゝには「通鑑綱目ニモ晋処士とあるは思いちがいか。(14)浪人——処士とは区別する。浪人は時に利を見て仕える。余論——享和本に、楠本本織田本にない次の一条がある。注目すべきである。「朝鮮李珥ガ聖学輯要ニ真西山ヲ疑テ李燔ヲ朱子ノ系図ニツリタルハ目ノアキタル事ナリ」と。李珥は李退溪と並んで著名な李栗谷である。李退溪が真西山を尊崇するに比し、李栗谷が真西山を疑い李燔を朱子の系図に引き上げたというのは注意すべきで稿を改めて他日論じたい。「八、治体」——(1)仕置——処罰ではない。紀綱とか規則。強斎は、治の本はそれに従事する人身を正すに在りとする。

(2) ダタイ―だいたい略。(3) 骨ガラミ―骨絡。絡は脈絡の絡。絡は筋又は網。ほねがらみは普通骨のうすくことであるが、こゝは骨筋という義。(4) 紀綱―典章法度のこと。書經五子之歌に、乱其紀綱と。余論―鶴山も強斎と同じく治の本を人君の身で説いた。「惣じて天下国家ヲ治ムル本ハ、人君ノ身ニ有リ。其ノ身ハ心ノ邪正ニ因ルノ、治ノ行ハレルハ賢ヲ用ル一ツニアルノト云。治政ノ本ト成リ惣体ニ涉テユク根ノ事ゾ」と。周子も天下を治めるの本を身で言い、而して天下を治めるの則を家で見ている。曰く、「家難而天下易。家親而天下疎。(通書治体一条)私情に溺れ易い家を治ることはむしろ天下よりむづかしい。明道も亦「必有関雠隣趾之意、然後可行_二周官之法度_一」(外書治体三十二条)と言う。治体の結びは張子の語を以てする。「朝廷以_二道学政術_一為_二三事_一。此正自古之可_レ憂者」である。二事は分れて二つという意ではない。故に葉采の注に「帝王之道即今日之政事、非_レ有_二兩途_一。今日之政術、即平日之学問、非_レ有_二三心_一也」と。勝れた見解である。「九、治法」―(1)時々出来合―その時の都合。(2)律度量衡―書經舜典に同律度量衡とある。書經插解(河田)に、同三律之清濁、度之長短、量之大小、衡之輕重と説く。(3)限り―きまり。(4)宗門改メ―耶蘇教禁止の手段としての江戸幕府の宗教制度。(5)造言ノ刑―みだりに言を作す刑。(6)仕置―こゝは処罰。余論―法は法度で治の具である。朱子はこの巻を制度とした。礼楽刑政を初め諸般のきまりにもわたり学制のことにも及ぶ。しかし定めの細事にわたるのでなく事がなされる根本的な理法を説くところに眼目がある。故に第一条に周子の礼楽を論

ずるを置くことに注意。「十、政事」―(1)全体ノ仕置―ここの仕置は処罰でなく処置。治体治法は全体の処置の本末、即ち治体は本、治法は末とする。(2)ツトムル役前―各自が勤める役前それが政事。余論―政事であつて政治ではない。鶴山は、政はシオキ事ハ其ワザ事業ゾと。即ち処置すべき業である。重ねて、役人タル者ノ心得、勤方ノ仕事ノ僉議ガ政事ゾトという。高上な法律論や政治論でなく近思の学であることに注意。尚斎も「政事以明_二任職勤_レ事之道_一と云う。「十一、教学」―(1)仕置バカリ―この仕置は処罰、(2)公事―訴訟。(3)夫ヲ犯ス―ないがしろにする。(4)其段―風俗とともに美しくなる段。(5)ワヅカニ―ちょっとでもこれで油断するといけない。で次に警戒がおかれる。余論―鶴山は、治体治法政事三者で「民治リ財足リテ国饒カニ食ニ飽キ煖カニ衣テ暮ス」ようになるがそれだけでは人倫の道を知らぬ故に「人タル義理ヲ知ラヒデハ禽獸モ同然ユヘツマル処ノ目アテガ教学ニ有ル事ゾ」という。漢唐以来治はあつたが教学が備わらないから「国穩カニ財豊ナ迄デ不忠不孝兄弟公事訴訟ガ絶ヌゾ。一在所ヲ治ル者モコ、ニ目ガ付ネバ本ノ治道デナイゾ」という。十二、警戒―(1)禍生懈惰―韓詩外伝の語。(2)其亡其亡係包桑―包桑は苞桑に同じ。易否卦九五の爻辭の伊川易伝の語。易伝云「桑之為_レ物其根深固。苞謂_二叢生者_一。其固尤甚矣」と。よつて「謂_二為_二安固之道_一、如_レ維_二繫于苞桑_一」と。危亡を戒め包桑に繫ぐことをいう。(2)忠信以―大学章句伝十章の語。(4)聖罔_レ思作_レ狂、狂克_レ念作_レ聖は織田本の語。人は一念の差で狂人ともなり聖人ともなる。書經多方篇に出る。余論―十一巻までに言うこ

とをこゝに引受て警戒するの意である。尚斎も「警戒以言、憂勤惕励之意不_レ如此、則第十一卷以上事皆廃亡」と。朱子はこの巻を改過及人心疵病とする。人心疵病は私意私欲の二つであるが、こゝはその警戒すべき大なるものについて論じている。「十三、異端」——(1)異端——論語に、攻乎異端_ニ斯害也已。(為政篇) 朱注に、異端非_ニ聖人之道_ニ而別

為_ニ一端_ニ。如_ニ楊墨_ニ是也と。(2)道学——義理の学。理学、性理学、程朱学、朱子学、宋学は皆その別名。余論——尚斎は、「異端以_ニ弁_ニ邪誕妖妄之説惑_ニ人塞_ニ道之害_ニ。不_レ明_ニ於此_ニ、則其学不_レ免_ニ有_ニ差_ニ。不_レ弁_ニ之、則天下亦不_レ知_ニ有_ニ正道_ニ。」(近思錄_{筆記})とする。その異端とは、楊・墨・仏老を主としている。ここの近思錄の本文で、江永注本と葉采注本に違いがある。楊氏為我疑_ニ於義_ニ。墨氏兼愛疑_ニ於仁_ニ (江本)を、葉采は義と仁を入れちがいにしている。二程全書、孟子集註は江本と同じである。朱子もまた「楊朱学為_ニ義者也。而偏_ニ為我_ニ。墨翟学為_ニ仁者也。而流_ニ兼愛_ニ」(江注引)としている。葉註が誤るが、諸家はこのことにふれていない。ただ近思錄集解便蒙詳説(榮田勝信)は、「コノ段、本文、仁義ノ二字ヲ上下ニ改メ置イテ可ナリ」と注意しているのは注目すべきである。山崎闇斎刊近思錄本文(寛文十年刊記、中村習斎講義書入本、永井禾原藏印、筆者藏本)は、葉注本のまゝになっている。闇斎はこゝに注意しなかったものと思われる。「十四、聖賢」——道ナリニ——道そのまゝになり得たものが聖人。道から離れぬように守ったものが賢人。

余論——朱子はこの巻を聖賢氣象とする。聖人を挙げ併せて賢人を論じ巻頭の道徳と相応する。強斎は之を巻軸一貫とし、鶴山は其の意を受

け、巻頭巻軸天人一貫とする。尚斎は、所_ニ以見_ニ為_ニ学之極功_ニ也とする。この巻は聖賢に併せて諸子を付して論ずる。朱子の著意を見るべきである。

四、結 び

以上前編につづいて、崎門派が大学の三綱領八条目と並んで近思錄の十四目を大切にしたこと、強斎は師説を承けて十四目の講義を行い、以て近思錄の本旨を発揚した所以のことを述べた。とくに其の本文を權威ある楠本・内田・織田三本を用いて考証し、かつ解説・余論を試みて強斎の意のある所を表章しようとしたものである。世に近思錄を講究する人士が、この十四目講義を参看し、以て近思錄の本旨を明かにせられるならば望外の幸せと存する次第である。なお強斎の近思錄師説と竹内式部の十四目講義及び享和本に見える李栗谷の真西山に対する出処説についての講説は他日の機会に譲る。